1 月 7 日

「あなたには将来がある」

箴言 23:18

武安　宏樹 牧師

「わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている～主のことば～。それはわざわいではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」(ｴﾚ 29:11) とあるように捕囚前の末期症状に、エレミヤは偽預言者が気休めを語るのと異なり、正面からさばきを語りつつ、捕囚の彼方にある 70 年後のヴィジョンまで示すも、民は「その後」のことより、今すぐ「将来」「希望」の実現を願います。未来を思い描けない人々の心の闇に、断罪や正論ありきでなく、慰め主の深い同情をもって寄り添えたら最善です。主イエスは自らへりくだり、罪人と共に滅びの淵から共に主を見上げました。私たちも自身の絶望体験を振り返って、そこからどのように主が引き上げてくださったことか。世の仕事に意味が見出せずに自分を見失っていた３年間、追われるようにして退職後に宣教団体の働きに、充実感と不安定感の３年間、転がり込むように入学した神学校で、学びと奉仕に励む一方で桎梏の３年間、以上の荒野を引き回され、母教会で伝道師として備えられる仕上げの３年間。ある聖日に語ったヨブ記説教から、聖霊の働きに時があることを悟りました。

「希望」の動詞形「待ち焦がれる」「心待ちにする」から、背後に「忍耐」の意が、隠されています。捕囚を前にした民は不満＆不安と、即効性のある処方箋を求める心に満ちていました。けれども主はカナンを前に足踏みした荒野 40 年、異国で自分が何者か問われたバビロン 70 年、時間稼ぎと言いたくなるような、遠回りを通して、主は私たちとの関係に介在している不純物を取り除きます。農夫の刈り込み (ﾖﾊ 15:)、毒麦の焼却 (ﾏﾀ 13:) で、自分本位の枝葉が撤去され、スッキリして向こうの世界、待ち望んでいた将来と希望が見えるようになる。これこそ聖化で、罪を赦された確信と共に主にいよいよ近づかんと志します。パウロの名言「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」(ﾛﾏ 5:4 新共) 主が示された将来と希望を見るまでに、信者は以上３段階を踏む必要がある。自分が経験したこととして、隣人の苦境を受け止めた上で、ある時は励まし、ある時は背後で祈り、霊的な洞察を得ながら適切に関わることが出来ます。罪人の無責任による「わざわい」さえ、「平安を与える計画」へ動機付ける主は、受けた愛を還元することを通して、教会の交わりは似姿まで成長するのです。

1 月 14 日

「真理を知っているから」

Ⅰヨハネ 2:18-25

武安　宏樹 牧師

「今は終わりの時」「反キリスト」など、おどろおどろしい表現が並びますが、「終わりの時」とは特定の年月日を指定しておらず、主が地上に来られてから、現在までの、教会が宣教を担いつつ再臨を待ち望んでいる幅のある期間です。「反キリスト」は本書だけに登場しますが、偽教師＆偽預言者＆偽兄弟などの、「偽」がつく者全体を差し、ヨハネは教会内の「仲間」が聖書的教えから逸脱し、兄姉を引き抜いたり教会を混乱させたりして、信仰の弱い人が巻き込まれる、一見して素晴しい人に思えるが、巧妙に浸透する厄介な輩がいると語ります。「彼らとは地上的交流を共有するが､天的出自は共有していない。ただ終わりの日に麦と毒麦との完全な分離が明らかにされるのである。」(ﾃｨﾝﾃﾞﾙ注解)そんな人々がいるのかと特定することは、私たちのすることではありません。「反キリスト」には定冠詞が無く、人でなく背後の霊の見分けを求められます。まず私たちは御言葉に親しみ、知識だけでなく受肉して悔い改めに導かれて、聖霊の満たしを受けつつ、古い自分を十字架につけ新しい力を受けましょう。「出て行った」人は共通して、明け渡し(＝私)を拒む頑なな部分が見られます。

「彼ら」に対し「あなたがた」が対比＆強調され、出て行った人を呪うよりも、信者を励まそうとしています。直訳「あなたがたには･･･ある(英訳'have')」目的語が無いので変ですが、最近の日本語で「持っている人」などと言います。運やツキといった巡り合せでなく、心理学的な行動パターンからでしょうが、「あなたがた」キリスト者は何を持っている、いや何によって持っているのか。それが「聖なる方からの注ぎの油」。旧約では預言者＆祭司＆王の即位の際に、選ばれた少数の特別な者に注がれたのが、今や全ての信者に特権的に注がれ、私たちが聖書の真理を正しく知るために、聖霊が油を注いで光を灯されます。さらに私たちの内なるエンジンが、錆びつかせることなくなめらかに回って、加えてキリストの肢体の一部の私たちに、信仰にとどまるように励まします。「とどまる」恵みをぶどうの木に喩え(ﾖﾊ 15:5)、「持っている人は豊かになり」山上の説教で語られました(ﾏﾀ 13:12)。外の方が楽しく思えることもあれど、素晴しい宝を内に宿している実感から、私たちは主にとどまることができる。出た人が戻るよう祈りつつ、私たちは真理を知る者として愛し合いましょう。

1 月 21 日

「クリスチャンの３つの喜び」

ローマ 5:1-11

武安　宏樹 牧師

こうして、わたしたちは、信仰によって義と認められたので、わたしたちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。 神との平和とはイエス様を信じて仲良くなること。

①神の栄光を喜ぶ（２節）「神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」
神の栄光とは？　あなたの望みは何ですか？
cf. ヘブル人への手紙 12：1-3
私たちはこの世で１番でなるのではなく、人生のゴールは天国です。

②苦難を喜ぶ（３～８節）「苦難さえも喜んでいます。」
苦難が喜び？「苦難が忍耐を、忍耐が品性を、希望を生み出す」
艱難を喜ぶとは「それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っています。」 そして、この希望は失望に終わることがありません。
希望は失望に終わることはない。神の愛のゆえに。
聖霊によって神の愛が私たちの心に満たされるとき、平安と喜びと希望に満ち溢れ、どんな患難が襲って来ようとも、それさえも喜ぶことができるようになります。

③神を喜ぶ（９～11 節）「それだけでなく、私たちは神を喜んでいます。」(11)
何が一番の喜び？　神こそ喜び。

1 月 28 日

「来臨のときに」

Ⅰヨハネ 2:26-29

武安　宏樹 牧師

終わりの世に惑わしの霊は片時も休まず、信者は戦いを余儀なくされます。ヨハネの視線は出て行く者にではなく、「あなたがた」キリスト者に向きます。マタイ 25 章はともしびを手に花婿を迎える娘たちと、しもべの能力に応じて、各タラントの財産を預けるたとえの後に、羊と山羊の選別の話が続きますが、私たちは救いの油を常備し財産を活用して、善い行いに投資が求められます。「御言葉は客観的な防護策で、御霊の注ぎは主観的な体験であり、使徒による教えと天の教師のいずれもが、真理のうちにとどまるのに必要」(ﾃｨﾝﾃﾞﾙ注解)要するに御言葉と聖霊体験のバランスを取ることが、信仰生活に必要ですが、言うは易く行うは難しです。いずれか極めるだけではつかめないということ。「正しすぎてはならない。悪すぎてはいけない。一つをつかみ、もう一つを手放さないがよい。神を恐れる者は、この両方を持って出て行く。」(伝道 7:16-18)知識も知恵も必要。祈りと黙想、善行に励むことも。されど程度が過ぎると、高慢や魔境に入り訳が分からなくなる。反対に何もしないと霊性が鈍ります。改めて信仰のバランスを保つのは難しく、聖霊だけが中庸を教えてくれます。

「その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてくれます。」(27 節)は、「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え･･･」(ﾖﾊ 14:26)の繰り返しですが、主イエスは去られた後の聖霊の臨在に、ヨハネは「すべて」に力点を置くので、バランスの欠如した私たちには、「聖霊」が「すべて」を究める二重の恵みです。御言葉の字面に留まらず、文脈や行間や著者の息遣いまで恵みを受け取って、使徒の言い伝え(＝神学)をマニュアル通りでなく、知的霊的に体験して悟る。教えられたとおりのことを聖霊が深めることで、いまだかつて教えられない、新しい発見に目が開かれる。御言葉にも教会にも次第に情熱が失われるのは、聖霊だけが目を開かれることを知らず、自分の力で解釈＆適用するからです。聖霊は教会を生み出す動力ですから、人の行動や思考回路と雰囲気に働かれ、惑わしの霊を見破ります。学者や霊能者など特別な賜物も素晴しいですが、中途半端で取柄の無いと思われる凡人こそ、聖霊が働きやすい器となります。「すべて」からは過去と現在を思うだけでなく、再臨こそ救いの完成と語って、逆算して教勢停滞の我が国で未来を待望する、着実な歩みを可能にします。

2月4日

「私たちは神の子ども」

Ⅰヨハネ3:1-3

武安　宏樹 牧師

私たちキリスト者は願望や努力以前に、信じるだけで神の子です(ﾖﾊ1:12)。肉の家族同様、子から父母の子になりたいと認知を求めることはありません。乳を飲ませ、抱き、食物を与え、歩き方を教えるのは他の動物も行いますが、社会で生きるために何が正しいか悪いかの知性を教え、処世術にとどまらず、試練を乗り越えて生きる意味を説き、自立のために二人三脚で共に歩みます。人の成長は知的＆情緒的＆経済的自立と、神を愛し人を愛するためにあって、人の家族は親から自立しますが、私たちは神と共に自立する特権があります。家庭環境の格差で若者の人生が左右されることを、「親ガチャ」と言いますが、人間的見方として恵まれている人とそうでない人が居ますが、共通するのは、神の前に罪人で受けるべき祝福を受けられず、自立できず、人生経験積めど、何のため生きているか分からず、他の神々や自分や有力者を頼りに生きつつ、自分を太古の昔から造られ知られ、愛して救おうとされることを見出さずに、罪を重ねて際限無く努力する空しい人生です。神の赤子として抱かれる時に、私たちは安心して力を抜いて甘えるように乳を飲み、信頼するのが大事です。

一方で神の子どもである事実を、ありのまま受け止めることに苦労します。どうしても両親から、次いで先生や先輩や友人の言葉に傷つき影響されます。違和感と不適応を感じつつ、それでもキリストにとどまることを求めます。「私たちの交わりとは、御父また御子イエス･キリストとの交わりです。」(1:3)受けるだけでも求めるだけでもない、三位一体に囲まれ両側通行の交わりで、御言葉と一つにされる臨在の中に在れば、罪を犯し続けることはありません。以上の結果は「キリストが現れたときに、キリストに似た者になること」(2節)その時100%似姿に変えられます。では現状は40%か70%か分かりませんが、赦すこと、愛すること、自制することに難儀して、砕かれ祈り求める現場で、聖霊は着実にきよめてくださいます。その御手に赤子のように裸になって、在天の神と、天地をつなぐキリストの十字架と、我が内に在す聖霊を確信し、縁組された親子関係に立って、祈りの手を上げることから全ては始まります。「御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。」(ｶﾞﾗ5:16)御言葉は適用すると主の真実と自分の成長が分かります。

2 月 11 日

「悪魔のわざを打ち破るため」

Ⅰヨハネ 3:4-10

武安　宏樹 牧師

本書の流れをおさらいすると、一つ目に神とキリスト者との「タテ」の関係。罪の存在を否定し自分から肉体を切り離して、霊的体験で救われると偽装し、その暁に罪を犯しても構わないと惑わす、不法の輩「反キリスト」がいる一方、神の前に自分の罪を認めて、キリストの赦しの中を歩み続ける信者がいます。つまり罪は無いと言いつつ奴隷となる者と、罪に敗北しているように見えて実は勝利している者という逆転現象で、キリストの救いは恐ろしく公平です。されど救われてからの過程は、賜物と献身の違いで各人各様の成長をします。二つ目に「ヨコ」の関係。霊性は個人的＆神秘的に非ず互いに愛し合うことが、バロメータとなります。偽り者は自己愛に熱心でも隣人愛で馬脚を現します。

本日の箇所は以上を踏まえて読むなら、罪と聖化の関係に目が開かれます。４節「罪」の一つ目は定冠詞単数で、一つの罪を犯しても不法の誹りを免れず、二つ目は無冠詞単数から、人の罪の性質や存在がそもそも不法だと示します。パリサイ人の如く小細工で律法を守るとか、金や善行では無罪になりません。５節「罪」の一つ目は定冠詞複数で、主は世の全人類の罪全てを取り除くため、二つ目は無冠詞単数から、キリストは存在的に人と違って罪は見出せません。かくて６節「凡そ主に居る者は罪を犯さず、凡そ罪を犯す者は未だ主を見ず、主を知らぬなり」（文語）となりますが、８節「罪をおこなふ者は悪魔より出づ」罪を犯して転落、悔い改めで復帰を繰り返し、不安に囚われないでしょうか。

日本語に訳出されませんが、６節「とどまる」「罪を犯しません」「罪を犯す」８節「罪を犯している」（２回）９節「罪を犯しません」「とどまっている」「罪を犯す」10 節「義を行わない」「兄弟を愛さない」以上は継続を表す現在時制ゆえ、キリストにとどまるにも罪を犯すにも、いずれに帰依するか意志が必要です。偽り者は真理を知りつつ意識的に不法を生き甲斐とし、確信犯的に罪を犯し、教会に潜入して未成熟な信者を引き抜こうと、羊の皮を被った狼のようです。私たちは習慣的に犯す罪があるかも知れない。これでは救われないのでは？たしかに罪を犯せば聖霊が悲しまれ、託された証しの務めが止められますが、贖い主の証印は病根を断ち、悔い改めで「打ち破り＝解放」を日々体験します。

2 月 18 日

「行いと真実をもって愛し合う」

Ⅰヨハネ 3:4-10

武安　宏樹 牧師

10 節末尾～４章で、偽り者が決定的に欠如している「愛」について語ります。互いに愛し合うことは救いの条件ではないので、地獄に落とされはしません。されど聖霊の働きに逆らって頑なに憎むならば、地獄の如き煩悶を喫します。よって愛せぬ人がいるならば、罪を認め御前にへりくだり赦しを得ましょう。自らの愛の無さを認めて、聖霊の働きによって愛し合う群れが主の教会です。「初めから聞いている」(11 節)とは、新約聖書では主イエスの戒め(ﾖﾊ 13:34)、旧約聖書では人類最初の出産が殺人者となる、カインの近親憎悪から(創 4:)、素直に非を認めず食い下がる意欲も無く、傷ついたプライドで邪魔者を消す、まさに「兄弟を憎む者はみな、人殺し」(15 節)私たちもみなカインの末裔です。

「すなわち自分と他人の命を保持するため出来る限り注意深く研究し、合法的に努力すること～慈悲深い思い、愛、同情、柔和、親切により、穏和な礼節ある言葉遣いや行為、忍耐、進んで人と和らぐこと、傷害を忍び耐えまた許すこと、罪の無い者を保護し防御すること」(ｳｪｽﾄﾐﾝｽﾀｰ大教理 135) 「悪をなす者だけがこの戒めの違反者ではない。隣人に善をなすことができ、危難災害の起こらないよう未然に防ぎ、保護し、救助できながらそれをしない人も同罪である。隣人への愛を拒み、助けられたはずの善行を奪ったからである。」(ﾙﾀｰ大教理)

17 節で愛の不作為についても断罪します。改めて私たちは愛し合うことに、誇れるものがありません。牧師は信徒以上に嫉妬＆功名心＆不作為の誘惑に、悪魔から絶えず攻撃を受け、「世」からの愛を亡きものにする圧力は苛烈です。13 節で原文は「世」の直後「私たちは～」で、キリストの贖いで愛を知るに至る、「捨てて」は一回限り完結の過去時制で、罪人の捨てきれない自己愛と対照的、「分かった」は完了時制で過去に知り現在まで、主が愛を教え続ける恵みです。ただ十字架を見上げるならば、聖霊がきよめと奇跡をもって愛し合えるよう、キリストの内に在る私たちは導かれ、かくて「兄弟」(複)にいのちを「捨てる」(現在時制で継続の意)者と成ります。傷つけられた人を未だに悪く思ったり、苦手な人の陰口や、体裁良い返答で他の愛する選択肢を捨ててはいませんか。愛せないと悟るなら、主にあって愛を受け成長しきよめられ甲斐があります。

2 月 25 日

「御霊による平安」

Ⅰヨハネ 3:19-24

武安　宏樹 牧師

「行いと真実をもって愛しましょう」(18 節)を受け、「私たちは～神の御前に心安らかでいられます」(19 節)互いに愛し合う真理が神との関係を深めます。世の言葉に良心の呵責があります。席を譲らなかったり物を盗もうとしたり、愛は無い訳では無くても配慮の欠けた言動、疲れると感情的に怒ってしまう。すべきことをしなかったり、逆にすべきでないことをしてしまったりします。苦々しい思いを抱えることは良いことではなく、謝罪と許しが必要ですが、それで万事うまくいくとは限らないのが難しいところで、言葉は内面から、出てこないと信用されません。神を知ることでも人を知ることでも共通して、相手を知ろうと努めることから関係が深まります。好きだから優しいからで、男女関係が立ち行かないのと同様に、痛いことを言われ愛に難儀しながらも、それでも捧げるのが人との関係であり、神との関係です。真実に捧げるなら、自分が出来ることの限界が分かります。あわせて相手の限界も分かります。行いにも言葉にも基本的に表すべきですが、控えた方が良い時もあります。以上の分別をキリスト者は、祈りと御言葉のコミュニケーションで弁えます。

「神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです」(20 節)こそ「心安らか」の基盤です。自分の罪深さに救われていないかと不安になり、人を傷つけ心穏やかでない時も。落度なくても人の冷たい態度が刺さります。そういう時に人の業で詰めすぎるのも駄目ですが、逆に人の知恵で身を引くのも良くありません。責められている心を、いやし慰めるのは神のみです。全知全能の方の前だからこそ謙虚でありながら、深い人間観を持てるのです。「御霊の実は、愛、喜び、平安」(ｶﾞﾗ 5:22)左記は聖化によるので時間かかれど、着実に御霊は実を結ばせます。神はどのように大きな御方かを想像しながら、自分の限界だけでなく能力と賜物も見出し、目の前の問題への傷ついた感情、恐れに止まらずに別の視点に目を開かれ、心空しく期待して祈り始めること。22 節は「求めよ、さらば与へられん。尋ねよ、さらば見出さん」(ﾏﾀ 7:7)からで、加えてヨハネは祈りの接点と方向性を、御言葉が照準を定めると語ります。愛し合う祈りで人が変わり、自分が変わります。知恵と悟りの内なる御霊が、精神と肉体を貫き、難しい人と和合させ、私を通して愛の栄光を現されます。

3月3日

「霊の見分け方」

Ⅰヨハネ4:1-6

武安　宏樹 牧師

前章で偽信者は隣人愛に欠けている、共同体的特徴について説明した後に、本章は彼らが「御子を否定する者」(2:22)との個人的特徴に話を戻しながら、５章までキリストが私たちと同じ人間性を取られた、重要性を説明します。「霊の見分け」は因習の強い地域における、人的地域的な霊的解放の必要から、20世紀終盤より宣教学的に注目され、聖霊の顕著な働きを知らしめましたが、その反面で福音が可視的基準で測られ、人為的になる弊害をもたらしました。パウロもキリストの肢体論で「霊を見分ける」(Ⅰコリ12:10)賜物を明記しつつ、自分の罪深さを偽装するために、聖霊の力を借りて敬虔にふるまうのでなく、真の見分けとは、私たちと同じ人の形で来られた御子の恵みを知ることです。「凡(すべ)ての霊を信ずな」(1節文語)キリストの神性や人性を巡っては、三位一体はじめ神学的議論が積み重ねられ、以上を否定する異端は退けられましたが、今に至るまで惑わしの霊は信者の道を踏み外させて、教会をかき乱すために、聖書全体のバランスを欠いたり、神のことば「である」⇒「となる」と教えたり、聖霊の働きと称して人為的解釈に走ったり、諸霊を「吟味せよ」と警告します。

「人となって(＝肉をもって)来られたイエス･キリストを告白する霊」(2節)こそが信者の真贋をテストする基準です。罪深い我々と同様の肉体を纏(まと)われ、来られたことを救いの恵みとして受け止めて、告白しなければ偽りなのです。偽信者の誤りは肉体を悪い欲望を生む癌として脱ぎ捨て、人間以外の存在になろうとしたことです。「反キリスト」＝「反肉体」。肉体には体と心も含まれ、私たちも情欲や憎しみといった肉の欲を受け入れるより、克服しようとして、苦闘してきた者です。けれども本当に罪深く肉欲に満ちて人間的な私たちと、同じ姿で同じ誘惑に遭い同じく苦しみ、とはいえ罪は犯されなかった御方が、私たちの罪のために死なれた。だから肉体から目を背ければ、自分の罪から目を背け、キリストの肉体から目を背けることになり、ここに惑わしの源が存在します。神がどんなに温かい心で御子を送られ、私たちの罪を犯す場に、憐れみの目を注ぎ続け、断腸の思いで御子を死に至らせたか目を背けるなら、福音の核心から的を外すのです。「告白する」原語は同じことを語る意味です。内なる肉体のキリストが声を響かせ、人間臭く愛し合う交わりを生むのです。

3 月 10 日

「ここに愛がある～This is Love」

Ⅰヨハネ 4:7-12

武安　宏樹 牧師

「ここに愛があるのです」新改訳は 10 節最後ですが原文は冒頭に登場します。「あった」「あるでしょう」などではなく、現にここに愛が存在して流れている、確固たる信仰が、赦されていない罪悪感と満たされぬ心と惑わしを退けます。７節語順は「愛する者たち。愛し合いましょう。互いに」と、'愛' が連続します。６節結語が「偽り」から、「偽り」「愛」キーワードでがっぷり四つ相撲を取らせ、 最後は「愛には恐れがありません」(18 節) と、「愛」に軍配が上がる結果でした。私たちは「愛する者」ですが、果して愛し合っているかと言われると疑問です。愛さなくてはならないけど愛せない、自分のポリシーに照らし愛したくない、同じ屋根の下にいるだけで息苦しい。そういう人が周りに１～２人はいます。「互いに愛し合いましょう。」そう言われても愛したくない！と叫びたくなる。「愛は神から出ている」とヨハネは私たちに動機付けます。人からではない。頼りない人間の努力に根差していない。「全的堕落」私たちは愛に無能力です。愛の無いことを認めて神を見上げないことには、スタート地点に立てません。私に愛は無くても神に愛がある。愛せない者の祈りから神の愛を体験します。

「神は愛だから」(8 節) の理由として、神が私たちに何をされたかが９節です。「遣わし」「示された」不定過去時制で、贖いの御業が十字架一度で完結された、「いのちを得させてくださいました」は、「～ために」と目的に取るべきです。10 節は「私たち」ではなく「神」がと、愛の主体は神であると繰り返しています。隣人を愛そうとする前に、ご自分のいのちを投げ出されて罪から解放された、主の愛を静まり黙想し罪を悔い改め赦しをいただき、受けて終わりではなく、感謝して再献身を誓うところまで扱われ、以上で愛の７割は達成されます。「いのちを得させ」は罪からの救いだけでなく、救われた後の歩みも含みます。私たちは互いに愛し合う目的のために、救われて永遠のいのちを受けました。キリストを見上げることで、愛せなかった人を愛せるようになる奇跡を体験、以前はイエスマンしか愛さなかったのが、迫害者やポリシーの違う人も愛し、彼らの救いのため祈り始める。「愛し合う」「どどまり」(12 節) は現在時制で、愛し合い続ける、とどまり続ける意。「全うされる」は完了時制で、9-10 節の贖いの出来事が今に至る意。神の主導権のうちに私たちの愛は発揮されます。

3 月 17 日

「とどまる愛」

Ⅰヨハネ 4:13-16

武安　宏樹 牧師

「とどまる」「～のうちに」は福音書＆手紙共に、ヨハネお気に入りの鍵語で、ぶどうの木に喩えられた(ﾖﾊ 15:)、主イエスと信者の有機的関係を証します。「キリスト教の真理の骨子が直接述べられており、これは福音の精髄である。」(14 節ﾃｨﾝﾃﾞﾙ注解)父なる神＆御子＆聖霊に囲まれ、私たちが福音宣教を行う、基本教理も示されながら、聖書全体を貫く「神は愛です」で総括しています。以上の隙間を埋めるように、「とどまる」神秘的交流が理屈と体験を繋ぎます。復活の主は帰天前「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい」(ﾏｺ 16:15)自分の世界に安住せず、神の示された地に一歩踏み出せと、命じました。アブラハムも「どこに行くのかを知らずに出て行き」(ﾍﾌﾞ 11:8)旧約の信仰者も新約の使徒たちも、出て行って敵と戦い魂を獲得し善を行い、陣地を拡げました。教会も同じです。「本教団の存立の目的は～聖霊の力によりキリストの宣教命令に応えて、神の栄光を現す～この目的のために、本教団は、犠牲を惜しまず、積極的な開拓伝道と堅実な教会形成による国内宣教および～国外宣教を推進して、地の果てまで福音を宣べ伝える」(教団教憲前文)

ところが闇雲にどこでも出て行けばよいかといえば、そうではありません。しかしモーセの遣わす斥候隊は、行くべきなのに行かず止められたのに行き、荒野の 40 年のさばきを受けます。主イエスも弟子たちに「待ちなさい」(使 1:4)と命じましたが、十字架で砕かれた弟子たちは失敗せず御言葉を守りました。復活の主の遺言は「出て行け」と「待て」＝「ゴー」と「ストップ」の両輪でした。出て行くために、とどまる。単にとどまるだけでなく、出て行く力を頂く。13 節はヨハネ自身が神のうちに自分、自分のうちに神、二重の愛の交わりを、体験したこと、以上を受けて 14 節で「私たちは、見て、その証しをしています」偽信者を意識しつつ、とどまる御霊から愛に押し出されることを強調します。自分の罪深さや醜さに目を背けるのでなく、聖霊に探らされて「神は愛です」力強く宣言しましょう。私たちは罪意識や焦りや敵対心や誘惑に煽られて、いたずらに出て行ってはいないでしょうか。惑わしの霊はタイミングを外し、急かしますが、雲の柱＆火の柱で導く主の前に、私たちが恐れたり身を隠す暗闇はありません。神の愛にとどまり続けて、出て行く力を充電しましょう。

3 月 24 日

「恐れない愛」

Ⅰヨハネ 4:17-21

武安　宏樹 牧師

「全う」が３回登場。私たちの内に罪の身代わりとしていのちを捧げられた、キリストの完全な愛があるからこそ、数え切れない欠けが覆われ赦し合える。夫婦も親子も牧師＆信徒間も、愛が在るかどうかが価値基準です(ｴﾍﾟ 5:)。神の愛は被造物を通して満ちていますが、私たちの愛により公にされます。「全うする」は主の受難に際し、神の御心全てが成就して「完了した」(ﾖﾊ 19:30)と同じ語です。「恐れ」はさばかれる恐れで、愛による信仰の不足に因ります。反キリストの霊はサウルのように、過去の罪を悔い改めず放置した傷みから、王座を狙われているという猜疑心や、心の浮き沈みに苛まれやがて死に至り、「恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていない」(18 節)恐れと愛は水と油の関係です。「恐れが少しも取り除かれなくても、私たちが神のもとへ、あたかも安全な、難破の危険も嵐や豪雨の危険も無い港へ向かうように馳せ行く時、恐れは実は取り除かれている。恐れは信仰に道を譲ったからである。神の愛をよく知った時、人々の精神は平穏になるから」(ｶﾙﾋﾞｧﾝ)「締め出す」直訳「投げ捨てる」。信仰成長は神との関係で徐々に深まります。

「私たちは」(19 節)が強調され、「恐れる者は」(18 節)と対比されています。神を愛し人を愛そうとする動機、神のさばきや人の評価を恐れない大胆さは、こんな罪人さえ神が愛されるという、自分でなく神の愛に出発点を置きます。20＆21 節は恐れる者の反応と、恐れつつ神と隣人を愛する者との対比です。難しいのは恐れが誰にでも均等ではないことで、母の胎にいる時から不安定、幼時に親から虐待や他人と違う性質など、人一倍の罪悪感と恐れを抱きつつ、疎外感から身を傷つけ、そういう集まりしか居場所を見出せない人もいます。関わる私たちも彼らに深く思いを巡らしながら、傷つける恐れに苛まれます。人間関係の深みに漕ぎ出すと困難を覚えます。心のどこかで報いを求めます。「愛する」とは何でしょうか。私たちの愛は条件付きの愛になっていませんか。愛のために悩み苦しむことは無意味でしょうか。「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。」病める人々も、体を外傷や罪を背負う痛みも、以上理解されない孤独感も、御子が傷つき献げた神の愛に不足はありません。恐れが来るたび「アバ、父」(ﾛﾏ 8:15)と叫ぶ、恐れど恐れない愛があるのです。

3 月 31 日

「神は愛です」

Ⅰヨハネ 4:16

武安　宏樹 牧師

① 愛によって造られた私たち（創 1:27-31）

聖書は創造主の神が天と地と全ての動植物、神に似せた特別な存在として、人を造られたことを記します。「神のかたち」は外見に非ず、善悪を判断して、生きる精神のことで、その内奥に神を愛し人を愛する霊性を備えられました。赤子は親に抱かれ乳を吸うことで、愛され受け入れられている実感を得ます。以降も養育しつつ次第に手を放しながら、精神的＆経済的自立へと導かれて、社会のモラルを学びながら家庭を築くのが、基本的なライフサイクルですが、ベルトコンベアに乗せられた人生、悪くなる世界の不条理に疑問を抱きつつ、私たちは自分が何者でどのように社会に参与すべきか、意味を求める者です。

② 愛を壊そうとする私たち（ロマ 1:29-31）

神の最高傑作である人は、本来は神の栄光を現す存在として生きる意味も、完全な道徳も備わっていましたが、最初の人は神に背いて悪魔へと従います。神の愛に背を向け自分の生きたいように生きることを、聖書は罪と言います。これにより神との交わりの部屋が壊れ、金も評価も恋人を得ても満たされず、人も社会も奪い合いを繰り返し弱っています。「罪の報酬は死です」(ﾛﾏ 6:23) 人生の意味を解せず、神から個人的に与えられた恵みを知らずに滅びるとは、恐ろしいことです。人生は神の御手の内に生きることで、初めて見出します。疲れを覚えている人はいますか？ 人生を導くパートナーが不在だからです。

③ 愛を回復される私たち（ヨハ 3:16）

罪人ばかりで争いの絶えぬ世を正すために、神は御子を私たちの代わりに、死刑に処しました。それだけでなく復活させたのは神が人を愛するゆえです。人生の目的と生きる喜びと自分に何が与えられているか、知らせるためです。「第一に、この方がそのよみがえりによって死に打ち勝たれ、そうして御自分の死によって私たちのために獲得された義に私たちをあずからせてくださるということ。第二に、その御力によって私たちも今や新しい命に生き返らされている、ということ。第三に、私たちにとって、キリストのよみがえりは私たちの祝福に満ちたよみがえりの確かな保証である、ということです」(ﾊｲﾃﾞﾙﾍﾞﾙｸ信仰問答 45)

信仰＆希望＆愛こそキリスト者の価値観。最上の愛に応えてキリストの門下生となりましょう。

4 月 7 日

「世に勝つ者」

Ⅰヨハネ 5:1-5

武安　宏樹 牧師

① 愛について

神を愛し隣人を愛することは言うまでも無く、加えて自分を愛することで、キリスト者の基本は「三重の愛」です。反キリストの者たちは肉体を忌み嫌い、罪を否定することで、心の深い部分で自分自身を憎んでいたと思われます。これは「自己愛」とは違います。自分を直視するだけでは愛することはできず、神を愛することで尊い作品とされていること、賜物を与えられていること、自分の過去＆現在＆未来全ての罪のために、十字架で死んでくださったこと。受けた愛をどのように隣人に適用するか、主イエスならどう接するかを想い、それで人を愛し祝福することで、心に神の喜びを感じて信仰が強められます。

② 信仰について

「信じる」は現在時制、「生まれる」は完了時制（過去～現在）であるように、神の救いの計画が在り、選ばれた私たちは時至って聖霊の導きで決心します。信仰は救いの結果で、人間の信頼関係同様に神との愛によって深められます。愛を知っていても信仰が不足すれば、自分の成長する実感が沸いてきません。逆に熱心だけでは消耗します。弱い自分を隠そうと鎧で身を固めるからです。主イエスは自分を投げ出して、恵みの海から喜んで私たちを愛されました。私たちの信仰はどこに根差しているでしょう。神に選ばれ新生した者として、十字架を背負いキリストを信じる実感から、希望の一歩を踏み出しましょう。

③ 従順について

「神の命令を守ること。それが、神を愛すること」（３節）愛と信仰が篤くても、聖書の御言葉に基づいていないと、一時的に実を結んでも倒れてしまいます。聖書はガイドブックや通読やデボーションなど、あらゆる方法で味わいます。今も生きて私たちのうちに聖霊を通して働き、神と人への愛を教え導きます。悪魔は愛と信仰を歪めるだけでなく、聖書信仰の無意味を盛んに惑わします。「勝つ」３回登場の中で、「打ち勝った」が一回完結を現す不定過去時制の他は、現在時制で「現に勝っている」意。洗礼式にて御前での誓約を思い起こしつつ、救われ続けている者として、御言葉で訓練されて愛と信仰を貫きましょう。

4 月 14 日

「御霊と水と血」

Ⅰヨハネ 5:6-8

武安　宏樹 牧師

①　水について

主イエスは、ヨハネが主の民に悔い改めを迫り応答する人々の列に混じり、洗礼を求めます。告白すべき罪も無い救い主に授ければ罪有りとしてしまう。彼はうろたえるも「このようにして正しいことをすべて実現することが、わたしたちにはふさわしいのです」(ﾏﾀ 3:15) 神の義に折れたヨハネは授けました。父の御心を子が行い聖霊が降る。三位一体の御名で洗礼を受くべき根拠です。創造以前の闇の大水に、ノア家以外沈んだ洪水に、敵軍が殲滅する葦の海に、 せんめつキリストは沈まれ私たちも共に沈んだ後に、起き上がり新しいいのちを頂く。そこに降られる聖霊が水だけでなく、炎で練りきよめ愛の人に造り上げます。

②　血について

「水によるだけでなく、水と血によって」強調するところに意図があります。反キリスト者たちが主イエスの受洗は認めても、人として血を流した死を、認めないからです。「血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。イエス･キリストのからだが、ただ一度だけ献げられたことにより、私たちは聖なるものとされています」(ﾍﾌﾞ 9-10:) 契約の血＆過越の血＆赦しの完成の血＆きよめの血＆聖所に入るしるしの血。最高の血が信者のうちに流れています。Ｃ型の血が流れ込み愛の人となり、罪と世と悪魔と戦い勝利する人種となり、私たちから循環して、世に和解をもたらすことを覚えましょう(ﾚﾋﾞ 17:11)。

③　御霊について

「御霊と水と血」(8 節) と順番が替わって、機能的に聖霊の主導権を表します。救いを導いて水の中に沈めるのも、体内に血を循環させ世に愛をもたらして、最期は使徒の如く殉教の血を流させるのも、全て執行者は聖霊ということで、キリストの肢体を構成する教会で、水と血を巡らせ建て上げるのは聖霊です。「この聖霊がわれらの心に水と血の証しを封印し堅固ならしめて～私たちの罪の贖いのために流された血が、私たちの魂の中に染み通ってくる」(ｶﾙﾋﾞｧﾝ) 主イエスが受けた洗礼も流された血潮も、地上で信者と共有するものですが、聖霊だけは天から降ります。同じ霊を共有して異なる賜物が与えられている。結果的に私たちに流れるキリストの血は、他の誰とも違うオンリーワンです。

4 月 21 日

「行いと真実をもって愛し合う」

Ⅰヨハネ 5:9-12

武安　宏樹 牧師

① 私たちの証し

「証し～日本のキリスト者」(最相葉月氏著/角川書店)が話題となりました。私たちには身近な語ですが、世の人々にはキリスト者の証しは異次元です。近年はキリスト教メディアが紙媒体や放送だけでなく、YouTube や各種 SNS 等、誰でも発信できる時代になりましたが、顔と顔を合わせて、神＆罪＆救いの福音をはっきりと伝えながら、キリストがどのように私の人生を変えたかを、直接的に語ること以上に効果的なものはありません。世の人々は 200 人中で１人しかいないキリスト者に何故あなたがなったのか？何が週ごと日曜日に教会に足を運ぶ礼拝させるのか？他宗教が売りにする御利益や栄達出世等、際立った要件や、家族が三代四代クリスチャン家庭だからとの慣習でもなく、何があなたを信仰に駆り立てるのか？駆り立てる見えない糸とは何なのか？私たちは敬虔なキリスト者という名の不思議な人種です。救いの経験だけで、10 年 20 年と信仰するには御利益や義理だけでは難しく、やはり何かあります。聖書の動詞の時制で現在形＆完了形が多いのは、そのことを暗示しています。

② 神の証し

私たちは救われました。この時制は過去の御業に基づき重ね合わせるので不定過去時制ですが、私たちは十字架と入信時を単に思い起こすだけでなく、今を生きているので礼拝に集います。とはいえ霊的に常に好調な訳ではなく、過ぐる週も罪を犯してした、夫婦や親子で喧嘩した、友人を傷つけたなどの、あるいは信仰者として存立に関わる危機に瀕している主日も、時にあります。けれども吸い寄せられるように教会に来て、メッセージが断片的に響いたり、賛美の歌詞にハッとさせられ、礼拝後の兄姉との何気ない会話に教えられる。教会内にペンテコステの御霊が働かれるので、よく考えれば当然なのですが、証しは第一に私たちの信仰や霊性でなく、神の与え給う歴史的事実ゆえです。「永遠のいのちとは神ご自身のいのちに他ならない。私たちに約束されていることは、現在ここにおいて神のいのちそのものに参与できること」(ﾊﾞｰｸﾚｰ)証しの主は私たちではなく神。有限なる人間が無限の神を 100%証しはできず、最終的な救いとしてキリストを送られたことが、究極の証しです(ﾋﾟﾘ3:8-9)。

4 月 28 日

「神様はこんな方です」

詩篇 139:1-6

原　敏夫 師

私の目にはあなたは高価で尊い（イザヤ 43：4）の御言葉からわかるように神様は高価で尊いものとして人間を造られました。 では、139 篇を見ていきましょう。神様は私たちの全てを知っておられます（v1-3)。そして見守って下さる（v3）と言っています。神様は私たちに自由意志を与えて下さいました。エバが罪を犯した時に止めることができたはずです。そうすればイエス様は十字架にかかる必要がなかったはずですが、自由意志がなくなったら人間ではなくなってしまいます。人間の尊厳を守るためには罪を犯すことを許されました。しかしその結果は、戦争などとなって表れています。その尻ぬぐいをイエス様はして下さったわけです。神様は私たちを支配されませんが、その尻ぬぐいを神様がされます。神様は私たちの悪い部分も含め、全てを知り尽くしたうえで、愛して下さいます。5 節にはあなたは前からうしろから私を取り囲みとありますが、取り囲むというのは軍隊が町を包囲することで、私たちは神様に完全に包囲されているということを言っています。包囲されていることは、そばにいたい、所有権の主張をしています。

・神様は私たちのことを大好きです。イエス様は私たちの全てを見ていてくださいます。私たちに対して絶大な関心があるから、特別扱いをしています。
・神様はいつも私たちと一緒です。神様は私たちにとって完璧な守護神だから、私たちは孤独ではありません。内側には御霊が住んで下さり、神様が私たちを取り囲んでおられます。
・神様は全責任を取ってくださる。キリストの十字架で私の罪をあがなって下さいました。
・神様はそのままの私を愛してくださいます。この確信を持たないと私たちは苦しくなります。
・神様は私に愛想をつかされない。「神は、世界の基が据えられる前から、この方にあって私たちを選び・・・」（エペソ 1:4）そしてキリストを犠牲にする程、私たちを愛されました。神様はいつも変わらない永遠の愛で私たちを愛されています。

5月5日

「私たちの確信」

Ⅰヨハネ5:13-15

武安　宏樹 牧師

「福音書と手紙の目的を一緒にするならば、ヨハネの目的は４段階になろう。つまり、読者が聞くように、聞いて信じるように、信じて生きるように、そして生きて知るように」(ﾃｨﾝﾃﾞﾙ注解)が「分からせるため」(13節)本書の目的です。というのは信徒たちが永遠のいのちの確信について、揺さぶられていたので、以上を体験するには祈りの生活で、キリスト者と反キリスト者の分かれ目は、どのように祈るか。長さや量でなく、祈る対象と的を得た祈りをしているか。祈りは霊的交流なので、主の御名を唱えながらも自分本位の祈りをするなら、悪霊を呼び込んで自分で自分の首を絞め、非常に危険なことにもなりかねず、実際に反キリストは表面的に熱心に祈れど、隣人愛を自己愛に巧妙に替えて、聖霊に敵対していました。私たちは的を得た祈りとなっているでしょうか？若い信者は何でも祈ってスッキリしたり、神の反応を探るのも良いでしょう。けれども祈る対象がどんな方か、運ぶ霊の働きに敏感になることが必要です。

一つ目に、私たちは世界を創造＆統治され、同様に私たち自身も造られて、「探り、知っておられる」(詩139:)善き御手で治められる聖い神に向き合っていること。大声で身の上話を述べる前に、主なる神は自分も無意識のうちに、心の奥の動機や不信仰やコンプレックスや敵対心等、全て知っておられます。その確信に立てば、対角線に立って挑戦するような祈りは必要無いと分かり、御心を探りつつ立ち位置を合わせ、御手に包まれて祈れば悪霊は退散します。　二つ目に、キリストの御名によって肉なる自分の死と、悪しき陣営の力が打ち破られていることを確信して祈ること。信じていないと山が動きません。「あなたがたがわたしに＆わたしがあなたがたに」(ﾖﾊ15:7)神秘的つながりで肉体と霊が一体に。主イエスは破れ口で神と人の合一を祈りました(ﾖﾊ17:)。この赦しと和解の確信に立つことで、初めて隣人をとりなす者となります。

　三つ目に、聖霊が水と血を循環させて(6-8節)、隣人を愛せるように変えられる確信です。私たちは三位一体の御名で洗礼式と聖餐式に与る共同体で、反キリストが欠落しているのが、愛すべき隣人のため愛して仕える祈りです。常識で考えれば愛せないけれども、聖霊の働きで愛せるように備えられます。愛せない弱さを御前に告白するなら、聖霊が視野を拡げ暗闇に光を与えます。

添付ファイル

5 月 12 日

「死に至らない罪」

Ⅰヨハネ 5:16-17

武安　宏樹 牧師

「死に至らない罪」「死に至る罪」聴く者におどろおどろしい表現が並びます。霊的な死のことで、「罪の報酬は死」(ﾛﾏ 6:23)全ての罪は死に至るものですが、死に至るのはいかなる罪のことか？①特定の罪②背教③聖霊を汚す罪など、議論されてきましたが、線引きよりも主体の反キリストを念頭に置きながら、14～15 節と同じ動詞で「神に求めなさい」(16 節)祈りの方向性を重視します。かつて「兄弟」として親しい交わりにありながら、教会を去って交わりを断ち、惑わしに加担する厄介者にも、いのちの蘇生を期するための高度な祈りです。

「このような罪を犯している兄姉の救いのための祈りは『キリストのからだである教会全体の完全を求める祈り』(ｳｪｽﾄｺｯﾄ)なのです。私たちが本当にキリストにある兄姉であるならば、本当にキリストにあるいのちの交わりを持っているなら、キリストの血潮によって贖われた私たちの兄姉が、目の前で滅びに陥っていくのを見て、憐れみの心をかき立てられず、祈りにおいて神の御前に出て、その兄姉の救いのために、いのちのために願い求めることをしないほど冷酷＆無情になることは出来ないでしょう。兄姉のためのとりなしの祈りこそが、主キリストにある交わりの特質です。」(田中剛二師説教集)

私たちは教会を離れて滅びようとしている兄姉のため、どれほど祈ったか疑わしいでしょう。良い人と悪い人、役に立つ人と有害な人、愛のある人と無い人、など付き合う価値のあるか無いかを、私たちは瞬時に判断したがり、悲しいかな捨てた人の方が断然多い。それが世の社会通念かも知れませんが、恐ろしいことに教会も毒されて、まともな信者が弱い人をさばいて締め出し、帰りの道筋を踏み出す気力さえ奪ってはいないか。効率化の波に晒されつつ、難題＆難しい人と関わるよりも、前向きで数字に表れることにシフトして、専門家に任せた方が合理的との、歪んだ教会論が神の愛と聖さを後退させ、「あとは神に委ねましょう！」決め台詞で、無責任な委ね方をしてはいないか。無限の天上の教会を有限の地上の教会に反映すべく、神学や戒規を尊ぶのも、必要な営みですが、果して逸脱し迷惑かけた者の復権は不可能でしょうか。説明が困難ですが、神の愛に不可能が無いことを覚えて悔い改めましょう。

5 月 19 日

「偶像から自分を守る」

Ⅰヨハネ 5:18-21

武安　宏樹 牧師

本書最終回。ヨハネの神学＆教会論が、終末を生きる私たちに悔い改めと互いに愛し合う実践を求めています。「私たちは知っています」３つの宣言と、最後に遺言として愛をもって厳粛に「子どもたち、偶像から身を守りなさい。」戦うべき相手は人間でなく、神との関係を断とうと惑わす偶像だと語ります。私たちも古い自分や内なる偶像を恋い慕い、足を引っ張られていませんか？

一つ目に「神から生まれた者はみな罪を犯さない」(18 節)そうは言っても、実際の私たちは罪を犯す者です。「生まれた」は過去の新生から今に至るまで聖霊によって新しくされ続けている、「犯さない」は習慣的に犯し続けない意。「キリスト者は罪の力から解放されている。現実に罪を犯さないのではなく、救いようもない罪の奴隷とか犠牲者にならないという意味である」(ﾊﾞｰｸﾚｰ)主ご自身が強力な「お守り」になられるので、苦しい時に偶像に心を向ければ、「ねたみの神」(出 20:5)が私たちを打たれ、主だけ信頼するように仕向けます。

二つ目に「私たちは神に属しています」(19 節)「この世は邪悪と腐敗しかないのだから、信者たちは神に従うため、必ず血と肉を捨てなければならない。しかしもう一つの点、すなわち彼らを呼んだのは神であること、これは彼らが神の助けを世と悪魔の全ての策略に対して使うことのできるため」(ｶﾙｳﾞｧﾝ)「私たちはこの世から神の御国の民として召され、神から出ている者として、いわば再び新たに悪魔の支配下にある、世に遣わされたのです」(田中剛二) 神を愛し世を憎むなら大胆に弱さを見せて、人に近づき世の深みに下れます。

三つ目に「神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださった」(20 節)動詞「来て」「与えて」はキリストの贖いから現在に至り脈々と、その結果「真実な方を'知る'」は現在進行形で知り続ける意。「～うちに」から、私たちは何処に居るのか。罪を犯し御顔を避けて隠れたアダムは挙動不審の放浪者となり(創 3:)、以降の人間の腐った知性は、神に届く文明を築かんと、日夜金と権力の結集のため律法違反を重ね、偶像を拝み神の怒りを重ねます。神を愛し隣人を愛する「知性」(ﾏﾀ 22:37)で、聖霊は神と人を結び合わせます。

5 月 26 日

「向きを変えて出発せよ」

申命記 1:6-7

面 舜　師

来年で戦後 80 年。本日は、元牧師が経験した福音派の過去と現在について、検証しつつ、神学者の視点ではなく、身近な視点から教えられたことを考えたい。

「１１日」(2 節)はエジプトを出てカナンの境界まで要する日数だが、「４０年」(3 節)要したのは「主の目に悪を行った」(民 32:13)アロンが金の子牛を造るなど(出 32:)、神に逆らいどうしであったため、その結果、「十分長くとどまった」(6 節)≒彷徨(さまよ)った。「向きを変えて」(7 節)＝悔い改めて。「出発せよ」アラバ･･･大河ユーフラテスまで、いわゆる約束の地カナンへ。行くに及んで、「命令を守りなさい」(11:8,13,18,22,27)。⇒神の命令を守らぬゆえ 40 年を荒野で過した、同じ轍を踏まないようにとの親心。かの地は「祝福の地」(11:11,14,23-25)であり、天からの恵みが降り注いでいる地。

戦後の福音派は急成長し、私が救われた 1970 年もこの勢いはまだ残っており、聖書の教えに着実に歩んでいた。現在はどうか？その指標を社会から見てみる。1) 「地の塩、世の光」(ﾏﾀ 5:13-14)クリスチャンは社会に影響を及ぼす責任がある。2) 「すべてのものを･･･満ちておられるところ」(ｴﾍﾟ 1:23)教会に世界の一切があり、教会から道徳倫理を発信する必要がある。3) 「キリスト者の社会的責任」(1974 年ﾛｰｻﾞﾝﾇ誓約第 5 項)地の塩は個人的色彩が強いが、良い社会運動に働きかける。　いずれにしても社会の縮図は教会の姿であり、責任の所在についても一体的。社会で暴力や詐欺が日常化し、地方公共団体がパワハラ等ひどい状態にある。以上の日本の現状と酷似した記述がイザヤ 59 章(7-8 節：暴力/13 節：倫理の欠如)。教会に目を転じると「聖書信仰」＝聖書は誤りなき神のことばを旗印として告白も、私の牧師時代に思わされたことは、聖書の強調している部分が語られていない。①聖霊の問題(とくに「力」)②さばきの問題。これらを指導者は語ろうとしていない。

イザヤ 59 章の続き⇒「さばき」(17-18 節)、聖霊の臨在(19 節)、贖われた者(20 節)教理が欠けると子孫が「福音はこの様」と思う。上に立つ指導者の責任は大きい。律法遵守とは聖書信仰に立ち、隅々まで解説して子孫に責任を持ちうる聖書観。行くべきカナンとは神の国。霊とまことの礼拝者は、どこでも祈ることのできる場で(ﾙｶ 17:21)、神の国は聖と義の状態も指し示す。カナンには恵みがあふれている。聖霊臨在を教会(集団)で受ける喜びに勝るものなし。これぞリバイバルであろう。

6月2日

「真理と愛のうちに」

Ⅱヨハネ 1-3

武安　宏樹 牧師

本書は第三の手紙とともに新約聖書で最短で、背景と内容は第一の手紙とほぼ同じです。「長老」とは教会役員のような役職でなく、先方と同じ立場で神と教会に仕える老信徒で、「選ばれた婦人」とはキリストの花嫁たる教会を、「子どもたち」とは信徒を差し、「私はあなたがたを本当に愛しています」(1節)老ヨハネは白髪と皺の笑顔で語ります。「本当に」は４節まで各１回登場する、「真理」と同語で直訳は「真理の内に」(共)。情緒的な愛でなく歴史的事実から、客観的基準と信仰に基づく愛です。真理は聖書の知識や体験や悟りのようで、「知っている」とは入信～現在までを通して、砕かれ悔い改め感謝する歩みが、伴うことで初めて自分のものとなり、真理を知る結果として愛が生まれます。「私たちのうちに(in us)」とどまり、「私たちとともに(with us)」在るのだと、隣人愛を生み出すための真理を、生き生きと内に住む聖霊として表します。「愛なしに真理を主張するとき、それはどこか歪んで伝えられてしまいます。一方、愛は真理の裏付けなしに、正しい方向性を持ち得ません。私たちがこのバランスを得るために、向かうべき方はイエス･キリストです。」(遠藤勝信師)

２節最後「私たちとともにある」は、原文は３節文頭で繰り返されています。「真理」の重箱の包みを解けば、三段重ねの「恵みとあわれみと平安」が見える。「この挨拶は願いでも祈りでもなく、『恵みとあわれみと平安があなたがたにあるであろう!』という宣言である」(W･ﾊﾞｰｸﾚｰ)私たちには高嶺の花の真理が、「恵みとあわれみと平安」を体験するフィルターを通し、隣人愛に結実します。「『恵み』とは、受ける値打ちも要求する権利も無い者に与えられる、神の主権的で絶対的に自由な愛。この一方的な愛ゆえに私たちは救われたのです。『あわれみ』とは、この世の生活にあって、私たちが気落ちした時の希望、悲しみに居る時の慰め、苦難を受ける時の忍耐、死の床にある時の平和など、私たちの救いに伴って、私たち一人一人の状態に応じて注がれる恵みです。『平安』とは、『恵みとあわれみ』が私たちに注がれている結果で、３つに私たちが必要としている全ての幸福＆祝福は含まれています」(田中剛二師)キリストの真理と愛を、恵み⇒あわれみ⇒平安の順に五臓六腑染み渡るまで、主との交わりに充てることで、私たちは「本当に」人を愛することができます。

6月9日

「行き過ぎない」

Ⅱヨハネ 4-11

武安　宏樹 牧師

９節「先を行って」。以前の訳は「行き過ぎて」、他は「先走って」「越えて」(協)私たちは熱心のあまり、やり過ぎ＆言い過ぎで害を与えて失敗するものです。

①「行き過ぎ」事例

最初の人は残念なことに悪魔に唆され、食べてはならない知識の実を食し、人は死ぬべき存在と堕しました。この木は本質的には人が食べるべきですが、神は知識と御言葉を結びつけ、人は神と共に歩んで善悪を知ると教えました。けれども彼らは目に見える景色と惑わす声を、神の戒めよりも優先させて、越権行為の罪を犯し、代償は霊的断絶と己の非を認めない高慢でした(創 3:)。二つ目にモーセ率いる主の民はカデシュにて、敵は見るからに手強いと臆し、不従順の罪を犯しただけでなく、「40 日⇒40 年」のさばきを受け止めず抗して、とにかく動こうと、さばきを逃れカナンを先取りしようとします(民 13-14:)。三つ目に預言者を待てず、命じられない礼拝を捧げたサウルの愚(Ⅰサム 13:)。以上の事例に共通するのは、善い行いでも主の時でないタイミングで強行し、悲惨な実を刈り取ることで、私たちも振り返りとへりくだりとが必要です。

②「行き過ぎない」事例

アブラハムは信仰によって故郷を離れ、主が告げられたとおり出て行って、実子を献げよとの「あり得ない」命令を受けます。代わりの犠牲は見当たらず、手を上げた瞬間に神が制し、御言葉に従う彼の信仰が称賛されます(創 22:)。少年ダビデは強大な敵に対し御名の誇りから、兄の怒りや王の説得に拘らず、立ち向かい勝利(Ⅰサム 17:)。人間的に越権行為で無鉄砲＆蛮勇と思われても、神の選びは年数や地位や能力を超えることを、エレミヤやマリアに学びます。彼は酷い仕打ちを受けても王に仕え、御手の中で主従関係を尊んでいました。バプテスマのヨハネは主イエスの先を行く者でしたが、先輩面するどころか、エリヤかキリストかの世論を拒否して、主の道を備える役に徹します(ﾏﾀ 3:)。キリストの半歩先を歩めど、彼の目は半歩後を歩み、最期は斬首となります。王への反抗という世の越権行為が、時に神の前に正義となることもあります。破門者ルター＆火刑者フスの上に、プロテスタント 500 年史は立っています。 世の価値観に安住せず主から先走らず、信仰の一歩で常識を打破しましょう。

6 月 16 日

「行って、直接話したい」

Ⅱヨハネ 12-13

武安　宏樹 牧師

本書結部「あなたがたのところに行って、直接話したいと思います。」(12 節)ここに使徒たちが開拓した教会の信徒たちへ、深い愛情が込められています。新約２１もの書簡が自ら「紙と墨で」書いたか、あるいは口述筆記などを通し、篤い祈りのうちに投じられ、現代に置き換えれば電話＆メール＆LINE なども、通信手段にはそれぞれ長短があり、意図したことを伝える限界が存在します。ひと時代前の牧師はハガキや便箋で、有難く温もりの伝わる達筆を頂戴して、近年はワープロ主流ですが、推敲できるのと手元に残るので手紙は貴重です。200 年前に固定電話、40 年前に携帯電話、ガラケーからスマホでＳＮＳもと、急速に便利になった反面、既読スルーを邪推されたりと隙間の無い昨今です。当教会も LINE グループで週報や諸報告を事前に一斉送信、欠席者も読めます。役員会も第一主日の会議を待たずとも、小さなことは即日決裁が可能となり、教団や宣教区などの会議も、コロナ禍のリスク低減から Zoom 使用が普及して、時間＆労力＆費用も削減されました。私たちは恵まれた時代に生きています。逆に言えば通信手段が過多となり、付き合い方と休息の自己管理が必要です。

文明は進歩しても、「口と口で」(直訳)「顔を合わせて」(以前の訳)会って、話すに優るものはありません。オンラインは受け答えの表情や間が分からず、大事な話は言うまでも無く、肩の力を抜いた交わりも、会うことに代え難い。新約時代は手紙しかないのもありますが、使徒たちは会うことに熱心でした。「あなたがたの顔を見たいと、なおいっそう切望しました。それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。しかし、サタンが私たちを妨げたのです～あなたがたこそ私たちの栄光であり、喜びなのです。」(Ⅰテサ 2:17-20) パウロの言葉に愛とフットワークを見ます。離れても祈り続けていましたが、信徒たちの苦境を聞いて現地へ行きたかったのに、どうしても行けなかった。交わりは、行って＆一つ所に集まって＆語り合い＆祈り合うことが基本です。オンラインも適宜活用すべきツールですが、それだけでは弱くなってしまう。人間関係は共に過ごし、心から語り合い、受け入れ合い、慰め励まし合いで、行って分かること、話してみて自己の悩み苦しみの深い話題に及ぶものです。訪問＆傾聴＆伝道＆交わりを、牧師も信徒も共有して教会は強固になります。

6 月 23 日

「よそから来た人たちのため」

III ヨハネ 1-8

武安　宏樹 牧師

本書の背景は第一＆第二同様ですが、第二が教会の信徒たち宛なのに対し、第三は教会の指導者的立場のガイオ宛で、ヨハネは彼を高く評価しています。冒頭 11 語中３語も「愛」から、個人的愛情に加えて誇るべき人物と分かります。教会の現場で異端の嵐の防波堤に苦闘し、教会や健全な教えから離れる者や、影響された者から批判を受けたり、その大変さは察して余りあるものですが、彼に世話になった兄弟たちからの耳にする感謝から、御心に適った奉仕には、必ず実が結ばれて、彼の右腕となって祈り仕える者の存在を知らされます。苦しみと協力を通して、福音宣教とキリストの肢体は建て上げられるのです。「よそから来た人たち」(5 節)⇒「旅人」(ﾏﾀ 25:33/ﾍﾌﾞ 11:13)「他国人」(ｴﾍﾟ 2:19)寅さんの如きフラフラとした放浪でなく、「御名のために」旅立った人々です。「旅人をもてなすことを忘れてはいけません」(ﾍﾌﾞ 13:2)家庭も仕事も捨てて、異教徒から何も受けず「主の恵みにゆだねられて」(使 15:40)伝道する彼らに、面識なくても御使いをもてなすように家に通し、ガイオは愛を示しました。そのことが送り出す＆受け入れる両教会の、励ましと徳を建て上げたのです。

教会には彼のように、批判され顧みられなくても主の愛で与えようとする、外向きな人がいる一方で、ディオテレペス(9 節)のように自己愛的＆病的に愛の業を妨げる残念な人々もいて、指導者は忍耐しつつ愛を語り続ける他にありません。そういう困った者たちは悪の軍勢だと一線引くのは簡単ですが、支援者も反対者も主の民である共通項を探りたい。「幸いを得る」(2 節)には、「成功する」「繁栄する」意があり、一歩間違えば現世利益になりかねませんが、語源は「良い旅をする」から派生して、神との関係でも世でも幸いを得ます。したがって人は全て旅人であり、イスラエルもエジプトで在留異国人として、現地の人々にすがって生きて来たことを思い起し、彼らも同じようにせよと(ﾚﾋﾞ 19:33-34)ペテロも「あなたがたは旅人、寄留者」(Ｉﾍﾟﾃ 2:11)と語ります。私たちは選ばれた旅人であり、世では最低限の持ち物と評価で良しとして、自分を守らず、周囲の声に思い悩まず、財産や家族さえ私することをしない。パウロはローマ書 12 章で、献身⇒キリストの肢体⇒愛の奉仕へ論を進めます。自分が何者で何を目指し何をすべきか熟知し、忠実に行う彼に学ばされます。

6 月 30 日

「善を見習いなさい」

III ヨハネ 9-15

武安　宏樹 牧師

ヨハネの手紙最終回。旅人をもてなし忠実な指導者ガイオとは対照的な、「かしらになりたがっている」頑なで病的な、ディオテレペスが登場します。 彼を放置すると教会が混乱するか、ガイオが疲弊する危機をヨハネは感じて、一言で言えば人格的問題がありました。第一＆第二のような神学的異端では、ありませんが、狭くて我が強いカルト的手法で自分のやり方を踏み絵にして、認める人は優遇し認めない人は追い出す、反論を許さない恐怖政治の様です。専制的リーダーほど小心で、恐れに囚われ、その反面で頭と口はよく回って、優しい信徒ほど巻き込まれる傾向にあります。ガイオの方が序列は上位でも、年齢や社会的地位や言葉はディオテレペスが上で、振り回されたでしょうか。使徒が戒告に出向くなど介入が必要でした。おそらくガイオは若かったので、もてなしなど奉仕を忠実に行いましたが、気が優しいのか言葉足らずなのか、厄介者と対決に気が進まなかったのか、心許なかったのではないでしょうか。けれども教会の主キリストは、若くて弱い指導者にあらゆる助けを備えます。それが使徒たちの後ろ盾や、おそらく本書を持参した善者デメテリオでした。

「ヨハネはデメテリオを推薦するのに、三重の証明に訴えています。第一は、『すべての人たちの証言』で彼の品性＆働きは、どの教会の兄姉にも定評があった。第二に真理そのものの証明で、彼の全生活を見ればどのように主を信じて、いのちの交わりを持つ者であるかが、はっきり分かるというのです。第三にヨハネ自身の証明を付け加え、単なる人間的＆個人的な証言ではなく、主にある一つのいのちの交わりのうちにある彼が、御霊によって証言します。信仰と愛、信仰と倫理の生命的統一を示す、実際的な教えです。」(田中剛二師)　福音は信じる者の人格を通して現れます。ディオテレペスの霊的な暗さをガイオに証するには、対照的なデメテリオの人となりから自明とのことです。第二の手紙は教理的行き過ぎ、第三の手紙は運営的な行き過ぎが問題ですが、いずれも神との関係に問題があります。私たちはどのように適用すべきか、一つ目に十戒に照らして「ほかの神」がないか、人を傷つけたりしていないか、チェックリストに用いることです。二つ目に恵みに照らし出過ぎていないか。落ち着いて正義と恵みのうちに歩めば、最初は一人でも理解者が得られます。

7月7日

「進んで献げる心」

出エジプト 25:1-9
武安　宏樹 牧師

本書を大別すると、出エジプト(1-17:)、律法賦与(18-24:)、幕屋(25-40:)。分量の割に前の二つに比べて扱いが少ないですが、幕屋から学んでいきます。

① 神が住まわれるための幕屋（８節）
雷鳴と稲妻と厚い雲が山上に、角笛の音が鳴り響く戦慄の光景を目にして、恐れる民を残してモーセはアロンと共に会見に上ります。民は聖別の必要と、衣服を洗うことを命じられた上で、興味本位で見ようとして死なないために、一線を引かれました。その恐るべき臨在を覚えるため幕屋の構造があります。門は東に一つだけ(ﾖﾊ 10:9)、庭の東半分は民が出入り可能な礼拝者の広場で、その中央に毎朝夕に献げられる祭壇があり、西側の聖所は洗盤の水で手洗い、その東 2/3 は祭司が入れますが、最奥の西 1/3 は至聖所で年１回大祭司が入る、特別な場所で、その中で十戒を記した二枚の板を収める箱は最も重要でした。「幕屋」は「住む」派生語。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」は、天幕を張る意です(ﾖﾊ 1:14)。旧約時代に至聖所は一つでしたが、新約時代は、信者の数だけ存在します(Ⅰｺﾘ 3:16)。「いつでも＆どこでも＆だれにでも」と、私たちはコンビニ礼拝をしていないでしょうか。罪への甘さと恐れの不足は、主がねたみの神ゆえに災いを招きます。皆さんは聖い恐れに満ちていますか。

② 進んで献げる心（１～２節）
幕屋設営のための資材を、心から進んで献げることが求められています。人でも金品でも強制徴用は不可です。ダビデが神殿建築の準備をしたときも、自ら喜んで提供を申し出た上で、民の主体性に委ねていますし(Ⅰ歴 29:5)、第二神殿の時も神の御手が民を奮起させて、立ち上がっています(ｴｽﾞ 1:5-6)。これに対してソロモンは「役務者を徴用」(Ⅰ列 5:13)。やり手だったのですが、人間的な方法論は罪を引き起こし(Ⅰ列 11:)、王国分裂の遠因となりました。教会の献金や奉仕も同様で、強いられてでなく進んで献げているかどうかを、振り返る必要があります。聖い恐れと自分から献げる心はつながっています。けれども神が恐るべき恵みにあふれる方であると、正面から受け止めるなら、貧しい寡婦のように献げずにいられません(ﾏｺ 12:41-44)。パウロは語ります。「いやいやながらでなく、喜んで与える人を愛してくださるのです」(Ⅱｺﾘ 9:7)

7 月 14 日

「ともしびを絶えず」

出エジプト 27:20-21

武安　宏樹 牧師

①「ともしび」

「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」(詩 119:105)二枚の板に記された十戒のみことばは至聖所の箱の中で、垂れ幕の向こうに、みことばに導く燭台は聖所側に。私たちを照らし一対一に向かわせる光です。私たちの内に光があります(ﾖﾊ 1:5)。「あなたがたは世の光です。」(ﾏﾀ 5:14)と、主が言われたのは、光源ではなく土の器の中から闇の世へと照らすからです。朝に夕に祈りを捧げながら、自分は果して世の光なのかと不安になります。それは未だきよめられていない闇の部分で、30 度しか照らしていない光を、向き直って 360 度照らされることで、なおもみことばへと向かわせるのです。

②「絶えず」

ともしびを絶やさぬよう油の注ぎが必要で、聖霊の象徴として登場します。干からびた霊に油注がれたことはありますか。油を注ぐことは私たちの奉仕、注がれることは天から。全身全霊を主に向けながら奉仕と恵みとが相俟って、注がれます。「キリスト」の語源から、私たちキリスト者は油注がれた者です。油を注がれた火が、至聖所手前の香壇へと移されて祈りの香が立ち上ります。か細い祈りで始まっても、視野が開かれ闇が照らされ、引っ張られるように、祈りが導かれる経験はありませんか。迷いの雲消え、不思議な確信が来ます。「常喜(じようき)祈(き)感謝(かんしや)」(Ⅰﾃｻ 5:16-18)絶えざる奉仕に絶えず油注がれ主に近づきます。

③「整える」

原語では軍事的な備え(ｴﾚ 46:3)、イサク奉献時の薪を並べる(創 22:9)など、整頓し備えることに用いられます。私たちの奉仕は整えることで始まります。毎週のルーティンを忠実に行うことが、主に向かう姿勢と結びついています。試練や重たい課題を抱える時は、出来ることから手をつけると祈りの展望が、開かれていきます。私たちは絶えず油を注ぎ、それ以上に主から油を注がれ、整えるのは私たちです。「大祭司は自分自身を弱さを身にまとっているので」(ﾍﾌﾞ 5:1-4)アロンは神と人の間に立ちながら、不名誉な失態を犯すも(32:)、子孫はヨハネです(ﾙｶ 1:5)。弱さのうちにも力づけられて主に仕えましょう。

7 月 21 日

「三つのいけにえ」

出エジプト 29:10-18
武安　宏樹 牧師

①「罪のためのいけにえ」（１０～１４節）
無意識に、故意でなく、故意でも情状酌量の余地や、儀式的汚れなどで、全ての祭の日に全会衆のため献げられ、本章では祭司たち＆レビ人の聖別に。他が雌の羊や山羊に対し、祭司は立場の重さで若い雄牛１頭が要求されます。雄牛の頭に手を置き自分たちの罪を移すことで、罪の赦しの恵みを受けます。祭壇上と宿営外の二箇所で焼くのは、真のいけにえなるキリストの予表です。「キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって永遠に完成されたからです」(ﾍﾌﾞ 10:14)律法と比較するとキリストの偉大さを悟ります。どれほど祭司は罪意識に苛まれながら、真打登場を待ち望んだことでしょう。私たちの悔い改めも空しい心で、神に近づくことに挫けていないでしょうか。

②「全焼のいけにえ」（１５～１８節）
名前通りに祭壇上で焼きつくされ、贖いの意以上に礼拝者が主に対して、全く明け渡されて聖別される目的で、毎朝夕規則的に献げるべきものです。「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として」(ﾛﾏ 12:1)このいけにえからパウロは、キリストにある真の献身について勧めています。これに対してサウルが不在のサムエルに代わって、勝手に献げたいけにえは、自分の利害に従った結果です（Ⅰｻﾑ 15:）。私たちの霊･心･体はどうでしょう。自分が最も大事なものを献げて、愛情や憎しみも十字架につけていますか？赦しは当然に献身に導かれます。教職も信徒も朝に夕に主に献げましょう。

③「和解のいけにえ」（１９～３６節）
前二つは前段階に過ぎず、これが任職本来のいけにえです。その語源は、「完成」「完全」「平和」。神と和解した者が感謝と交わりを表す自発的な祭で、燃やすのに適した部分だけ主への火のささげ物、残りは人々が食べて楽しみ、奉献者＆招待者の祝宴に提供されました。神はご自分の民を養ってくださる。会見の天幕に仕えるレビ人の如く、相続地無くても相続分は用意されます。「何も持っていないようでも、すべてのものを持っています」(Ⅱｺﾘ 6:10)この自由度の高いいけにえは信仰が問われます。苦しみにしか思えぬ試練さえも、主が私を造り変える機会だと、感謝につなげる信仰こそ最善のいけにえです。

7 月 28 日

「主がいつくしみ深い方」

詩篇 34:1-10

山下 亮 師

本篇に記されている「味わい 見つめよ。主がいつくしみ深い方であることを。」ということばに照らされて、主がいつくしみ深い方であることを私たちが日々どのくらい味わい、見つめているか、振り返ることができたらと願います。

1～3 節では、サウルにいのちを狙われるという困難の中にあっても、ダビデは、助けを与えてくださる主を賛美すると告白しています。そしてダビデのその賛美は、共にいる者にも喜びと励ましをもたらしているのです。私たちも、困難の中にあるときにも、主が与えてくださる恵みに気付かされ、主を賛美し、主から力と励ましを受け取る者とされましょう。

4～7 節では、「私が主を求めると 主は答え 私を救い出してくださった」というテーマが取り扱われています。私たちが主を求めるときに、私たちといつもともにいてくださる主が、助けてくださるのです。ここで大切なことは、「私が主を求めると」ということです。私たちから主体的に主を求めることは、主が与えてくださっている恵みに気付くための大切なステップなのです。助けを与えてくださる主に、祈り求めて歩みましょう。

8～10 節では、「味わい 見つめよ。」という呼びかけをもって、主がいつくしみ深い方であることを味わうようにして経験し、見つめて理解するようと聖書は私たちに勧めています。そのいつくしみ深い主を恐れ、礼拝する者は、良いものに何一つ欠けることがないのです。

私たちを救い出してくださった主がいつくしみ深い方であることを日々味わい、見つめて、主の恵みの内に歩み続けましょう。

8月4日

「香りの高い香りを」

出エジプト 30:1-10

武安　宏樹 牧師

幕屋の聖所と至聖所とを隔てる垂れ幕手前の「香をたくための祭壇」から、天におられる神に向かって献げられる「香り」について。仏教「香の十徳」には、①感覚を研ぎ澄ます②心身を清浄にする③穢れを取り除く④眠気を覚ます等焚く者の心身リラックスも謳います。対して聖所の香壇には祭司しか入れず、特定の人が特定の方法で主なる神だけのためと指定されて、焚くべきもので、本書最終章には「モーセは、すべて主が彼に命じられたとおりに行い」(40:16)御言葉通り忠実に行う信仰が求められますが、不名誉にもアロンの息子らは、「異なる火を主の前に献げた」(ﾚﾋﾞ 10:1)ことで、天から火が下り焼死します。皮肉にも任職式直後でした。親の真似すれば聖所の仕事などちょろいものと、聖職者二世として悪い意味で慣れていたのか、主への恐れが欠けていました。人間的に見れば大勢に影響無く僅かな違いも、全てご覧の神には異臭がした。二世といえども弁解の余地無し。直接仕える者だからこそ聖を汚す不品行は、許されないことでした。「アロンは黙っていた」(ﾚﾋﾞ 10:3)父の心境は如何に。ダビデの息子たち同様に、金の子牛事件で自ら招いた刈り取りと言えました。

後の分裂王国時代に52年間在位し、国内外で手腕を発揮したウジヤ王は、権力が強くなると高慢に陥り、祭司でないのに聖所に入り香をたいた瞬間に、主に打たれて不治の病に陥りました(Ⅱ歴 26:)。かたや初心者かたや権力者。いずれも御言葉に従わずとも自分たちのやり方で、祭司など呼ばなくても、絶対うまくいくという自分本位の視点で、受け取る神はどう受け取られるか、喜んでいただけるかという、神の視点で見つめ直す視点が欠けていました。私たちもそういうことはないでしょうか。自分本位に奉仕すればどうなるか。互いに裁き合い競い合い表面的にしか愛さない、悪臭を放ってはいませんか。「私たちは、神に献げられた芳しいキリストの香りなのです。」(Ⅱｺﾘ 2:14-17)キリストは愛する者のためにいのちを惜しまず、死に至るまで従順を貫かれ、自分の欲望を混ぜる不遜さはありません。私たちはどのような香りでしょう。罪があれば、悔い改めを拒む頑なさがあれば、異なる火として天に届きます。内と外がバラバラな信仰生活は空しいもの。祈りの手を上げ(詩 141:2/黙 8:4)「キリスト我が内に在りて」(ｶﾞﾗ 2:20 文語)死んで生きる香りを放ちましょう。

8 月 11 日

「水で洗われて」

出エジプト 30:17-21

武安　宏樹 牧師

祭壇と会見の天幕の間で、水を入れ祭司が手足を洗うための洗盤について、旧約＆新約聖書全体から水によるきよめの意味について、見ていきましょう。日本人が想像するのは神社入口の手水舎(てみずや)で、川での禊を簡略化したものです。インドのガンジス川は聖なる水と呼ばれますが、日本の清冽さとは正反対で、洗顔も洗濯も排泄も遺骨も流し人生全てを包みます。正教会やカトリックは司祭が祈祷文と共に聖水を振りかけたり、新興宗教は水を買わされたりする。話を戻すと祭司は手足を洗い水を浴びて、憚ることなく神に仕えられたのか。御言葉通りに行いつつも、それだけでは困難で水の彼方に神を見上げました。聖書は「闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた」(創 1:2)未だ茫漠とした大水の塊を、創造主が御手によって保持していたことを語り、それから御言葉によって空と地上、海と陸が形造られ、昼と夜の循環の中で、動植物が造られ、最高傑作である人は全被造物を治める責任が与えられるも、不従順による堕落から神は世界を水の下に沈め、信仰者のみを救われました。祭司は水に沈められて救われなければと、恐れつつ神を見上げ仕えたのです。

「すなわち水中に沈むこと、再び出てくることとは洗礼の力と作用とを意味する。それは古いアダムを殺すこと、新しい人がよみがえることに他ならず、生涯を通して私たちの内部に行われるべき事柄であり、キリスト者の生涯は、ひとたび開始せられるや、絶えず続けられていく日ごとの洗礼なのである。時が経つにつれて次第に温和に、忍耐強く、柔和となり、貪欲、憎悪、嫉妬、高慢はそれだけいよいよ取り去られていくのである」(ﾙﾀｰ)罪の欲求は数々あれど徐々に弱められていく御霊の働きを感じますか。ソロモン王の罪への転落は、アダム伝来の不信と神との関係の隙間風から来ます。けれども捕囚の最中で、きよめの水の霊による内面化が預言され(ｴｾﾞ 36:25-27)、キリスト者と教会に絶えず泉のように湧き出て、岩盤の如く固い心に楔を打ち込んで溶かします。「生ける水の川が流れ出るようになります」(ﾖﾊ 7:38)約束を信じていますか。その流れは時に圧倒的勢いをもって、御言葉以外に拠り頼む基盤を押し流し、不安と混乱を経て、気が付けば箱舟が浮かび上がるように救いの実感を得る、激しい体験も聖霊の働きです。みなさんの内に大水が湧いています(ﾖﾊ 4:14)。

8 月 18 日

「匠の知恵」

出エジプト 31:1-11

武安　宏樹 牧師

天才や巨匠と呼ばれる人物は数いますが、神が与えた才が育まれた環境や、本人の努力を通して花開くのでしょう。世の多くの人は見える評価によって、自分の価値を決めています。私たちは社会で評価を受けながら生きますが、それは必ずしも神がひとりひとりに与えた能力に、見合ったものではなく、逆に言えば人の評価はそれはそれとして受けつつ、それを絶対視しなければ、私たちはもっと豊かに生きることができます。幕屋設営にてベツァルエルが、彼の才能や努力もさることながら、それ以上に神の働きのために上からの力、「知恵と英知と知識」が注がれて、「匠」となりました。大した能力の無い人も、全能の主を信じて召しと確信が与えられたら、本当にあなたが作ったのか？と驚かれるほどの「あらゆる務め」が出来ます。実際に主を天に見送った後の、弟子たちは聖霊を受けて一変しました。聖霊の働きは人から評価されやすい、能力の変化や成長だけでなく、評価されづらい人格的成長も含まれています。一見よい奉仕をする人も、聖霊の取り扱いを受けないと罪や問題を起こして、主の交わりに傷を残します。霊的人格的成長こそが奉仕の成長へ直結します。

「意匠を凝らす」の原意は「思い」「計画」「発明」で、同じ語幹の名詞＆動詞で、人間的な思いや企みにも、神の御思いや御計画にも、どちらも用いられます。ベツァルエルが意匠を凝らしているようで、彼を召されて霊を注がれたのは、主なる神であることから神と人との共同制作で、500 年後の神殿建築前にも、1000 頭の犠牲奉献に登場（Ⅱ歴 1:）。青銅の祭壇が陳腐化も壊れもしないのは、主が命じられたとおり彼の思いが聖く用いられて、意匠を凝らしたからです。「わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」（ｲｻﾞ 55:9）ここで「思い」は、「意匠」と同じ語です。高い評価を受けて鼻高々、あるいは自分の奉仕などと卑屈になったりする前に、一つ一つの働きを始めようとした自分の動機から、細かい部分のアレンジに至るまで、主の御手の中にあったか調べることです。主の御思いは人の知恵を超えているゆえ、私たちには見当つかないからです。匠の知恵とは、「主を恐れることは知識の初め」（箴 1:7）これに尽きるのです。彼には「助手」オホリアブが共にいて、知恵を共有しつつ職人を束ねました。信仰生活は個人競技に見えますが、全てが「匠」として強力する団体競技です。

8 月 25 日

「神様は恵みを注ぎたいのです」

ルカ 5:1-11

原　敏夫 師

神様はいくつかの計画をたてています。私たちの救いの計画は地球が出来る前から備えられていました（エペソ１：4)。人生において無駄だと思われることがたくさんありますが、信仰上では大切なことです。神様は私たちを用意周到に救いに導かれています。

漁師たちはイエス様が来られた時に網を洗っていました。何も取れずに落ち込んでいました。私たちは全ての事についてスムーズにいって欲しいと思っています。しかし、落ち込むことが多くあるでしょう。そんな私たち、そしてシモンにイエス様は近づいて下さいました。これは人生の成功者であると言えます。

今日の箇所ではシモンがターゲットだからこそ、シモンの舟を選ばれました。シモンが聞かざるを得ない状況を作られました。その上で「深みに漕ぎ出して、網を下ろしなさい。」と言われました。このことばはシモンのプライドを傷つけることばでした。シモンはイエス様に反抗しようとしましたが、群衆のことを考えると、しぶしぶその言葉に従いました。その言葉に従うと多くの魚が網に入りました。シモンにはイエス様への信仰がありましたが、ここではイエス様のことばに納得が出来ない、でも従ったら大漁が与えられました。イエス様はシモンが従える様、状況を整えられていました。それは数日前の姑のいやしです。

何故、シモンをその様な状況にしてシモンが魚を捕らなければならなかったのでしょうか。それはシモンに魚を捕らせることでイエス様が神の子であることを告白させることで祝福したかったからです。だから神様の方から近づいて下さいました。

大漁を目にしたシモンはイエス様の足もとにひれ伏しました。大漁は神様の祝福の証拠です。またペテロの罪が赦された証拠です。私たちの罪は 2,000 年前に赦されています。だから罪深い自分をイエス様に告白することで赦されます。ありのままの自分をイエス様にあらわす時に、神様はそのまま受け入れ赦して下さいます。神様は私たちの人生を導かれるお方です。

9月1日

「永遠の安息」

出エジプト 31:12-17

武安　宏樹 牧師

本章第三部の幕屋について、ここまではどのように設営や犠牲奉献などと、「何をすべきか」の指示でしたが、モーセと語り終えるにあたり「何もしない」第４戒(20:8-11)を主は繰り返します。安息の恵みを心から喜んでいますか？

一つ目に主がお休みになるので、私たちも主に在って休むということです。主は６日間で創造の全てを、「仕事としては」完成されましたが(創 1:31-2:1)、主の目には「完成」は「完全」に至らず、もう一日をどうしても欲せられました。全能の方だからお疲れになったのではなく、神が人に休む模範を示しました。「第７日はこれらを見ることにおあてになりました」(ｼﾞｭﾈｰｳﾞ教会信仰問答)安息日はボケッと無為に過ごすのでなく、忙しく動かす手を休め全体像を見、ここまで仕上がったのは自分の力や他人の協力以上に、神のタイミングから、説明不能な助けが与えられた御業を、賛美と共に喜び分かち合う日なのです。

二つ目に個人的に備えられた活力が働き、社会全体が健全になることです。比較すると本書は神の側、申命記は人の利益に強調点が置かれます(申 5:14)。一日も休まず働き続けると肉体が疲弊するだけでなく、精神的にも病みます。短期的に目標達成でもツケが回り、休職や医療費などリスクを考えるならば、休むべき時に休んで遊んで、さあ明日から！と回復する方が数字も上がるし、雰囲気が良くなります。ファラオの強制労働の背後には悪魔が見えます(5:)。安息を許さぬ組織に対し、キリスト者の聖が失われないために戦うべきです。

三つ目に、そうは言うものの私たちは休むのが下手だと認めざるを得ない。100%の力で取り組むことで、結果的に人の業で全うする罪を犯しています。幕屋の部では御言葉に従って最上の献げ物と、仕上げは創造同様に安息です。数字的には 6/7 すなわち 85 点、週休２日制に換算すれば 70 点を目指せばよい。パーフェクトを目指すと固くなり失点を恐れて、良い球が投げられなくなる。自分の限界を見つめて手を休めてみるところに、天からの恵みが見えてくる。救いに選ばれた私たちには上から祝福が注がれ、恐れから解放されています。動き過ぎて苦しんでいませんか。安息の空白に未だ見ぬ祝福が隠れています。

9月8日

「私は何者でしょか」

出エジプト 3:7-12

檀原　久由 師

今日の礼拝では、モーセの自問といえる「私は何者でしょう」から、私たちの人生の転機時における私たちの信仰について、考えたいと思う。

出エジプト記3章は、「モーセの召命」と呼ぶことができる。2章では、エジプト王女に水から助け出され、養育され、エジプトの大臣として国のために働いたモーセがいた。しかし、同胞のヘブル人を苦しめたエジプト人を殺したことから、エジプト王の追求を受けた。逃げ出したモーセは40歳、ミデアンの野で羊飼いとなり、結婚して子供も生まれた。

ところが80歳のモーセに、神は神の山ホレブにおいて燃える柴から、奴隷状態で苦しんでいる同胞イスラエルの民を救い出すように命じた。高齢者のモーセの反応は、自分は「いったい何者なのか」。無理という意味を示唆する。どうしてだろうか？-過去の面倒な殺人事件に向き合い、自分の命を危険にさらしたくはない、若い人の方が適任だ、羊飼いの生活で十分満足、信仰を失ったなど、いろいろな理由が考えられる。

モーセの返事に対して神は、「私が、あなたと共にいる。これがあなたのためのしるしである」と言われた。事実神は、雲の柱・火の柱となって、荒野の旅を一緒に歩いて下さり、イスラエルの民を約束の地に導いた。そして、モーセは満足して、平安の内に生涯を閉じることができた。

今は高齢者でも様々な理由で働かなければならない時代である。急な介護・育児・離婚・病気など、誰でも思いがけない転機がやってくる。人は自問するし、キリスト者は信仰を見つめ直すだろう。その時、モーセが苦悩の先に解決の光を見たように、私たちもキリストを通して約束されている恵みを信じようではないか！キリストは私たちの内に住み、共に働き、うめきを聴き、涙を拭い、喜びに変えて下さることを！万事を益として下さることを！

9 月 15 日

「わざわいを思い直す神」

出エジプト 32:1-14

武安　宏樹 牧師

本書の幕屋部分の中間 32～34 章には、大祭司が偶像礼拝を教導するという、 聖書で五指に入る不祥事が記されています。敵から救われて律法与えられて、 幕屋設営へ一直線と思いきや挫折は、私たちの歩みに重要な意味を示します。

一つ目に人間の無責任です。帰りの遅いモーセに苛立ってアロンに殺到し、「さあ､われわれに先立って行く神々を･･･」(1 節)最重要の戒めに逆らいます。主との関係における不信から全ての罪が起こります。民は待ちきれなかった。10 日間ぐらい緊張感をもって待ったでしょうが、30 日を超えると疑念が沸き、自分の内に抑え込んでいた不満が首をもたげて、心の隙間から忍び寄ります。不信の罪は一旦受け入れると歯止めが効かず、恵みの記憶も?み込まれます。さらに厄介なのは自分の中だけに留まらず、民全体に蔓延し欲望を正当化し、罪意識がマヒすることです。御言葉は各人を自立した信仰へと導きますが、罪は無責任と悪い連帯感でダメにします。私たちも同様の経験ありませんか。心かたくなに悔い改めをと聖霊の働きを拒み、誰かのせいにしていませんか。優しいアロンも大変でしたが残念なことに、罪と無責任の波に?まれました。偶像を造った上に苦し紛れの弁解と荒唐無稽な嘘は、さばかれるべきでした。

二つ目に神の寛容さです。この苦境に際しアロンも祈らない訳ありません。けれどもアロンの祈りは記されずに、モーセの祈りだけが記されているのは、神の愛と義への信頼ゆえに、感情も不満も一体にブチ当たって祈ったからで、御心の琴線に触れたからでしょう。単に自分の思いをガチンコでぶつければ、もちろん相応の答えをくださいますが、神が｢思い直す｣とは余程のことです。モーセは罪を見逃すよう求めたのではなく、御名が敵の笑い者にされるのは、あってはならないということで、民に厳しい態度で臨み粛正も行っています。されどアロンは不名誉な事実に拘らず、ヨハネの祖として系図に語り継がれ、どんな大罪でも悔い改める者に、神は思い直され憐れまれる寛容を示します。弟が兄に優るといえどもカインやエサウのにならないのは、彼の謙遜ゆえで、その後予定通り？大祭司として、麗しい式服着て水と油で聖別され仕えます。私たちも罪と弱さから悔い改めと共に、選びに生かされる恵みを知るのです。

9 月 22 日

「ここから上って行け」

出エジプト 33:1-3

武安　宏樹 牧師

「ここから」金の子牛事件の惨状に激怒したモーセが、二枚の板と偶像破壊、粛正後に責任を感じて進退伺を出したところです。民の罪が赦されないなら、彼の名が御国から除かれてもやむなしと、いのちをかけたとりなしでした。指導者としての強さと大胆さの一方で、仲間が滅びゆく悲しみと兄への責め、自らの力の無さ、なぜ私がこんな重荷を背負うのか？複雑な思いが交錯して、エリヤの戦い同様（Ⅰ列 19:）、疲弊し何もやる気が出なかったのではないか。奇しくも 32～34 章は直前と直後に、主からの安息日の戒めに挟まれています。モーセも安息が欲しかったのか、休みつつ一歩踏み出す力を求めていたのか、彼は招かれて御顔を求めて再び山に登ります(34:)。40 日間も断食したのは、一対一の交わりに時間を忘れたのでしょう。書き記した御言葉は文字に非ず、「あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない。」御声が大音量で、臨在に圧倒されつつ心身の疲れと傷がいやされ、表情に主の光が射しました。「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい」(ﾏﾀ 11:28)私たちも重荷を無視して強行するのでなく、主の御腕に憩うことが大切です。

「上って行け」言うまでもなく、主が約束された乳と蜜の流れる地へ(3:8)。原語「上る」には、「全焼の犠牲をささげる」礼拝的な意味が含まれているので「献げて行け」とも訳せます。神との関係において罪を犯し傷ついていないか、主にある静まり無しには、どこにも行けないということです(詩 139:23-24)。主の十字架を見上げ悔い改めと赦し無しに、見切り発車で奉仕すべきでない。だましだまし奉仕すると道が閉ざされていきます。どうか分からない時には、祈りつつ平安があるかが目印です。「行きたいから行く」「行きたくないから行かない」では、約束された地に辿り着くことが出来ず、祝福が失われます。悔い改めは内奥を主に探られ、きよめの痛みも愛ゆえと受け入れることです。そのうえで罪を犯す弱さは残存していますが、一歩ずつ歩みを続ける中で、遅れて確信が深められます。モーセは「上る＝献げる」だと分かっていました。だから御使いだけで動かず、主がご一緒でなければとこだわった(13-15 節)。御言葉と聖霊に噛みついてしゃぶるつくそうとする、野性味が彼にあります。どれだけ主に肉迫するかで恵みは変わります。御前に進み出ていきましょう。

9 月 29 日

「圧倒的な臨在」

出エジプト 40:34-38

武安　宏樹 牧師

本書第三部「幕屋」最終章です。モーセは大事業を終えることができました。順調だったわけではない。罪との戦いで民が打たれ、決死の思いでとりなし、兄の優柔不断に失望し、自らの足りなさを痛感した数ヶ月は長く感じられて、「主よ何故ですか？私が何故こんなことまでしなくてはならないのですか？こんなことで終わっては悲しくないですか？」ガチンコで語り合いました。この苦しみがあって民は一つに御言葉に従って、「その仕事」は完成しました。手がけてきた仕事が終わった！という達成感を経験したことがありますか？人間的には苦しみの末に成功体験と喜びを通して、私たちは成長できます。主に仕え教会に仕える者として、救いの喜び、成長の喜び、奉仕の喜びなど、時に新会堂や一大イベントの事業の喜びがあります。モーセはどうだったか。彼自身が民から祝福された記述はありません。私たちは自分の達成感とか、周囲からの評価を受けたいと願い、それが叶わないと負の感情が襲います。彼も事業を振り返ろうとしたかも知れませんが、完成の瞬間に臨在が包んで、主への恐れと賛美と感謝により、プライドも心の傷もおおわれていきました。

皆さんはどれくらい聖霊体験をしましたか。恵まれる集会もあるでしょう。本当の聖霊体験はいのちの息吹に関わることですから、何に頼って生きるか、どれほど罪深い者なのか、揺さぶられた末に主しか頼るべき方は無いのだと、自身が全焼のいけにえになるものです。パウロはダマスコ途上で倒れました。知識も栄誉も不足ない優等生に欠けていたのが、主ご自身との出会いでした。一変した彼は強さより弱さを、生より死を、人の評価よりも主の臨在を求め、「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる」(ｶﾞﾗ2:20)ことが全てとなりました。主の栄光が内にある確信が生きる目的を根本から変えていきます。さらに主の栄光は個人でなく民全体を祝福します。本章が 35 節でなく 38 節で終わることは、体験してメデタシメデタシではなく、ここから旅が始まることを意味します。雲が動くので民も幕屋も移動します。これ以降も一直線にカナンではなく、苦労と紆余曲折は続きますが(民 10:)、臨在から目を離さないことで、モーセは入れずとも次世代に達成しました。それ以上に素晴しいことは、主が再臨し御業を完成してくださることです。

10 月 6 日

「神の栄光の輝き①」

ヘブル 1:1-2

武安　宏樹 牧師

① 旧約時代に語られたこと（１節）

文頭「多くの部分」「多くの方法」。旧約時代に多くの信仰者が用いられます。彼らは故郷を出て、神のことばを語り、幾多の敵と戦い、約束の地に引率し、転落する王国のため涙をもってとりなし、来るべき救い主を待ち望みました。生い立ちや職業や用いられ方は様々で、罪に打ちひしがれ不祥事に心を痛め、孤独に苛まれて、それでも彼らは律法を行い、幕屋と神殿の礼拝に主を仰ぎ、神を恐れて信仰に歩みました。11 章は 30 回近く「信仰によって」が繰り返され、多様な人々が多種の状況で同じ信仰に歩みました。「昔の人たちは、この信仰によって称賛されました」(11:2)キリスト以前の信仰者の歩みは大変でした。本書は旧約～新約の信仰者と礼拝の過去･現在･未来が、キリストに集約され、逆に言えばたった一つの救いを通して、多くの歩みがあることが分かります。旧約聖書は神主体でありながら、信仰者たちの生々しい歩みを記しています。人生は神学の枠組みに規定されたマニュアルでも、既製品でもありません。罪を犯した時こそ悔い改めて神との新たな関係、その一歩が道となるのです。

② 新約時代に語られること（２節）

新約時代には、キリストに全ての救いの手段と人格と権威が集中します。信仰者の特徴全てが御子に集約しますが、一つ違うことは彼らが犯した罪を、主イエスは犯さなかったことで、私たちは唯一であり最終的な救い主であり、創造に関わって世の幕引きもされる、全ての絶対的な支配者を信じています。「御子にあって」は'in'で、御子の内に全てが注ぎ込まれることを意味します。「このキリストのうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されています。」(ｺﾛ 2:5)「私たちは真実な方のうちに、その御子イエス･キリストのうちにいるのです」(Ｉﾖﾊ 5:20)キリストの外に魅力的な処世術や魂の救いや世界の処方箋などは無いのです。さらに素晴らしいことは聖霊を通しキリストが内住されること。いかなる試練に遭っても、大きな罪を犯しても、その事実は変わりません。救いは唯一ですが、そのことは信者の生き方まで単一であると意味しません。聖霊は各人が隣人と違って、既成概念や模範に縛られない特殊(ユニーク)な人生を導き、頑なさや恐れや比較や不安から解放し、難しい状況や人間関係に勝利します。

10 月 13 日

「神の栄光の輝き②」

ヘブル 1:3-4

武安　宏樹 牧師

この箇所は本書全体の主旨ならびに、御子の性質と業が要約されています。「御使い」はユダヤ人の間では律法を運ぶ者と信じられ、コロサイ教会などは、礼拝対象とする異端も見られ、御子より下位へと正される必要がありました。もしも私たちの礼拝対象が父＆御子＆聖霊でなく、神と配下の御使いならば、その信仰は目に見えない霊しか信じず、人間の交わりも歴史的なつながりも、互いに愛し合う模範も無い、奴隷的な神の「お使い」にしかならないでしょう。人という目に見える形で御子が地上に遣わされたことに、重要な意味があり、私たちは父＆御子の関係同様に、御子にあって神と人格的関係を持つのです。

「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れ」御子の性質について。原語「輝き」は太陽のような発光体の放射と、月のように光を受けて反射との、二つの意味があり御子は前者で御使いは後者です。私たちはどちらでしょう。パウロは「鏡のように主の栄光を映しつつ、主と同じかたちに変えられて」と、後者を前提にしつつ、「これはまさに御霊なる主の働き」と内住の御霊を通し、輝きを放つ存在と暗示し（Ⅱｺﾘ 3:18）、主体的に栄光を現す存在でもあります。「現れ」にも「刻印」と「封印」の意味があり、御子には神の愛と義の性質全てが、印されています。同様に罪と弱さの中にいる私たちにも印が押されています。皆さんは心の奥深く聖霊住まわれ光放ち、刻印＆封印された特殊な人種です。

「その力あるみことばによって万物を保って･･･罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。」御子の御業について三点。「力あるみことば」は御子が目に見えない世界でなく、世の人間関係の狭間で、金と偶像にまみれた組織で、私たちが祈ってみことばを語ることで活きます。摂理の神は傍観者ではなく、世を愛されるあまり天から地上に来られました。「罪のきよめを成し遂げ」御自分の身も心もいのちも捨て、犠牲となりました。私たちに与えられた光と刻印は、万人祭司として信仰者の生き様に現れます。祭司だから渦中に放り込まれ、世界の救いときよめのために用いられます。「いと高き所で、大いなる方の右の座に」視点を下から上にＶの字に上げれば、世の束縛や人間どもの罪深さから解かれ、高く在す御子が見えます（ﾋﾟﾘ 2:）。

10 月 20 日

「御使いにまさる御子」

ヘブル 1:5-14

武安　宏樹 牧師

この箇所は本書全体の主旨ならびに、御子の性質と業が要約されています。「御使い」はユダヤ人の間では律法を運ぶ者と信じられ、コロサイ教会などは、礼拝対象とする異端も見られ、御子より下位へと正される必要がありました。もしも私たちの礼拝対象が父＆御子＆聖霊でなく、神と配下の御使いならば、その信仰は目に見えない霊しか信じず、人間の交わりも歴史的なつながりも、互いに愛し合う模範も無い、奴隷的な神の「お使い」にしかならないでしょう。人という目に見える形で御子が地上に遣わされたことに、重要な意味があり、私たちは父＆御子の関係同様に、御子にあって神と人格的関係を持つのです。

本日の箇所に旧約が７つ引用されますが、うち５つが詩篇からの引用です。必ずしも文脈的にメシア預言とは限らず、著者が自由に引用しているようで、いずれも御使いの如き滅ぶべき被造物と違い、御子は父なる神の長子として、永遠で同等の力と性質を持っていることを、旧約から実証しようとします。長子で思い浮かぶのは、エサウ＆ヤコブの記事ではないでしょうか(創 25:)。兄エサウは一杯の煮物を食べたいあまり、長子の権利を弟に売り渡しました。律法で長男は他の２倍を相続することが出来た。長子が神に属する者とされ、特別に価値があるものとされたからです。気づいて父に泣きつくも後の祭り、以降は殺意と虚しさに取りつかれ、そのＤＮＡはヘロデに流れます(ﾏﾀ 2:16)。それくらい長子の権利は重要で、イスラエルは諸部族の長子とされますが、「後の者が先になり、先の者が後に」(ﾏﾀ 20:16)福音は異邦人が先んじました。「天に登録されている長子たちの教会」(12:23)に私たちの名は記されており、みなが長子として周囲とエサウ＆ヤコブのような、骨肉の争い「競争」でなく、主だけを見上げて「競走」して、疲れて脱落しそうな者を励ますのです(12:)。

カインは優れた物を献げた弟に嫉妬、エサウは長子をせしめた弟に殺意を、兄息子は無一文で帰って来た弟に対して、父親の歓迎ムードに不満でしたが、彼らは長子でありながら、与えられている恵みに目が開かれていなかった。長年父に仕えて戒めも守ってきたのに、自分には微々たる分け前にも拘らず、碌でもない弟に宴とはと拗ねるのは、ただ働かされ報酬目的の卑しい心です。私たちは先に救われた者として、神と人とに喜んで仕えているでしょうか。長く居るだけとか考えるべきではない。神は弟以上に兄息子を大事にします。「子よ。おまえはいつも私と一緒～私のものは全部おまえのものだ」(ﾙｶ 15:31)御使い礼拝が当時広まっていたのは、高く在す神に人々が距離感を感じて、間を取り持つ存在を求めていたからで、ことばを神→人、人→神に運ぶ他に、無数の役割を割り当てられた御使いが存在し、告発担当のサタンもいました。けれども御子を世界に送られた時に、全ての御使いはひれ伏しました(6 節)。堕天使サタンさえ御子の牙城を崩せずに、最期は滅びに定められています。私たち長子の共同体に在す御子にあって、臆することなく祈り献げましょう。

10 月 27 日

「真の礼拝を目指して」

ヨハネ 11:20-27

檀原 久由　師

11 月 1 日は昔から、諸聖人の日または召天者記念日として祝われてきた。教会歴を大事にするプロテスタント教会もこの伝統を引継ぎ、11 月第一主日に召天者記念礼拝を持つ教会が多い。そこで召天者礼拝を含めた礼拝について考えたい。

第一に「死は終わりではない」。ラザロの病気を知らせる姉妹からの使いが来たことから、11 章は始まる。イエスは「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためである」と言われた。ベタニアに到着した時、イエスは「私はよみがえりです。命です。私を信じる者は死んでも生きる」とマルタに言われた。だから、イエス・キリストを救い主と信じる者は誰でも、死んでも生きることになる保証を得る。

第二は、信仰告白が教会を建て、礼拝の土台となる。イエスが「私はよみがえりです。命です。私を信じる者は死んでも生きる」と言われた時、マルタは「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じています」と答えた。マルタの言葉はペテロの信仰告白と同じである。「あなた方は、私を誰と言いますか」とイエスが尋ねた時、ペテロは「あなたは生ける神の子キリストです」と言った。イエスはペテロに、「私はこの岩の上に、私の教会を建てます」と言われた。

最後に、全ての礼拝は天上の礼拝を意識する。イエスがサマリヤで出会った女性に向かって、「御霊と真理によって父を礼拝するときが来ます。今がその時です」と言われた。私たちは、真実な心と信仰告白と聖霊の導きを意識しよう、召天者礼拝は、単に天に帰った信仰の先輩を思い起こすだけではない。黙示録 7 章は、天上でも聖徒たちが神への礼拝が献げていることを記す。天上での礼拝を覚えつつ、私たちの地上の礼拝を献じようではないか！霊的で理にかなった礼拝は天とつながりを持つ！

11 月 3 日

「こんなにすばらしい救い①」

ヘブル 2:1

武安　宏樹 牧師

① 私たちが聞かされたこと

「こういうわけで」は、主イエスが御使いよりもまさる１章を受けています。「律法を公布する際、キリストは仮面をつけてしか、自分をあらわされない～福音を公にする際には、キリストの栄光は鮮明かつ明白な仕方であらわれる」カルヴァンが言うように、仮面にすぎない律法に縛られて生きようとすれば、何のため真打が登場したか判りません。文字だけでも霊的感覚だけでもなく、肌と肌を合わせることでキリストの内住を体験するのが福音です（Ⅰヨハ 1:1）。聴きっぱなしですぐ抜ける、聴いても祈ろうとしない人は悪魔に揺さぶられ、いたずらな律法主義や新奇な教えに飛びつき、福音から離れてしまうのです。

② 心に留めること

原語は注意を向ける、用心する、専念する、心を奪う、同意するなどの意。心の向きを一定方向に集中させていく語で、三重に注意が喚起されています。キリストの福音を日々思い起こし、十字架の救いの適用に根を下ろしていく。航海用語で「錨を下ろす」意も。私たちは主につながる努力の継続が大事です。罪を犯すことも試練も数々あります。「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります」(ヨハ 15:4)福音は闇雲な努力を求めません。ぶどうの木の枝とされて、農夫が努力しているからあなたがたも努力せよと。恵みあふれた主の働きかけの中で、私たちは信仰を働かせることができます。

③ 押し流されないこと

原語は不注意や無意識ですべり落ちる意。航海用語で船が港や停泊地から、漂流する意も。結婚指輪は外そうと思えば外せますが、スルッと抜けるのは、不注意も甚だしい。それくらい強い吸引力や接着力で契約の指輪となるのが、福音の力です。罪と世と惑わしの戦いは激しく、暫し敗れることもあります。されどよく分からないうち、聖書読まず祈らず教会に行かずが最も残念です。思うように出来ていないことは、主に目を上げ努力をしているからＯＫです。旧約の先達は「旅人」「寄留者」(11:13)でも、「漂流者」ではありませんでした。心の深い部分を主に向け、地に足をつけ、信仰のアンテナを確認しましょう。

11 月 10 日

「こんなにすばらしい救い②」

ヘブル 2:2-4

武安　宏樹 牧師

主イエスからいやし＆悪霊追放を受けた人々は、弱さを持った人々でした。不治の病や盲人など絶望的な人々や、5000 人給食や湖上歩行やラザロ蘇生等、人には信じ難い奇跡も。当教団三本柱の第一に聖書信仰が掲げられています。処女降誕と復活に関しては、当り前のように使徒信条で諳(そら)んじていますが、それだけでなくキリスト者は、超自然的な恵みが起こると信じることです。

「奇跡の目的で最も重要なのは、人間の代理人にではなく源である神に栄光を帰すこと。第二に啓示の超自然的基盤を確立すること、『しるし』はこの次元を強調している。第三に奇跡は人間の必要を満たすために見られ、我らの主は、御自分のもとに来た貧しく傷ついた者への同情に動かされた方として、描かれ、力の誇示という利己的な目的でなさったことは決して無い」(ｴﾘｸｿﾝ)

しるしと不思議について最も触れられているのが、出エジプトの奇跡です。赤子モーセが水から引き上げられ、燃え尽きない柴の中で神が臨在を現され、あぶやバッタや雹を降らす天変地異に、極めつけは海が開く奇跡の連続です。聖書は「はじめに神が･･･」(創 1:1)と神の存在が前提です。「わたしはある」方。海が開き山が動く訳が無いと人が考えるのは、神が常識を超えているからで、もっとすごいのは御声により無から有を生む、天地創造ではないでしょうか。 自然も科学も社会も歴史も生活基盤の全ては、摂理の御手で守られています。 全能の神はしるしも不思議も奇跡も、「わたしはある」方ゆえ存在の一部です。

神は限りある人間が理解することの助けとして、律法と御使いを遣わされ、今や私たちは内なる聖霊に照らされながら、聖書から神のことばを頂きます。けれどもどんなに聖書に精通しようと、頑なで不信仰な思いが砕かれないと、「わたしはある」方が隅に追いやられて、しるしも不思議も現れないのです。主イエスは罪深くどうしようもない人間のために、地上で共に歩まれました。救われそうもない人が救われるのも、愛せない人を愛せるようになるのも、主が立たれたら不可能が可能になる。私たちがしるしと不思議を証しします。まず私たちが砕かれモーセの如く万歳するところに、未だ見ぬ恵みが来ます。

11 月 17 日

「低くされた方」

ヘブル 2:5-9

武安　宏樹 牧師

『人とは何ものなのでしょう。』作者は詩８篇を引用して最初の人アダムに、神の最高の作品としての尊厳を覚えつつ、結論から言うと第二のアダムなる主イエスを指すと語ります。この疑問は世の人々が漠然と抱いていますが、聖書は神が心に留めるかけがえのない存在として、生理現象や食物連鎖の獣、見えない世界で働く御使いと違い、神の統治の業を代行する存在と語ります。「人のおもな､最高の目的は､神の栄光をあらわし､永遠に神を全く喜ぶこと」(ｳｪｽﾄﾐﾝｽﾀｰ大教理問答 1)真の神を信じる私たちは、何のために生きているか、悩まずに済む幸せな人種です。異教社会に生きる私たちキリスト者の務めは、創造主＆救い主なる神に加え、人とは何ものかを生き様で証しすることです。神は御使いでなく罪ある人に世を支配させる、非効率的な方法を用いました。御使いに支配させた方が事務的に捗りますが、神および人との関係において、罪を犯したり言うことを聞かないと、御使いのように滅ぼされるとの恐れを、親の教えや歪んだ受験競争や企業の数字至上主義や、ＳＮＳの中傷合戦など、これまでの人生で受けた様々な傷の中で、私たちは持っていないでしょうか。

私たちは神のお使いでも指導者の下僕でもない。奴隷の心ではいけません。神に似せられた人格を与えられ、何が御心で罪か知的感情的体験的に味わい、主体的に創造主を愛し、その愛で家族を愛し友人を愛する温かい存在です。けれども逆の「だれも気にかけてくれない」「努力しても顧みられない」という奴隷的なつぶやきが私たちの心に湧き上がってくる。古い肉と罪の亡霊です。不遇な家庭や過酷ないじめやカルトで苦しんだ人は、それが強く出てきます。さらに悪いことには無意識のうちに、自分が受けた傷を他人に投げつけます。旧約の五書＆歴史書と新約の福音書から、忍耐深い神の愛を学び適用しつつ、どこを掘り下げて悔い改めるべきか、聖霊に探られるのが祈りの生活の要で、天から恵みの御言葉は陰府に下られた主イエスの如く、矢印が下に向きます。本丸にとどめを刺さず、周辺ばかりの表面的な悔い改めをしてはいませんか。主イエスが人の姿で来られたことを、十字架を頂点として謙卑(けんぴ)と呼ばれます。罪を犯してばかりで神の役に立てない、私たちと共に地上で生きるためです。負債は全て支払うと、御子は親子の絆をもって私たちと歩んでくださいます。

11 月 24 日

「栄光に導くため」

ヘブル 2:10-18

武安　宏樹 牧師

『苦しみにあったことは私にとって幸せでした。それにより私はあなたのおきてを学びました。』(詩 119:71)私たちはトラブルに巻き込まれることを、厄介な人と関わったり、自分の手に負えない仕事が回ってくることを嫌って、そういう状況にあって「すべてのことにおいて感謝しなさい。」(Ｉﾃｻ 5:16-18)結論から言えば苦しみは、「キリスト･イエスにあって」感謝に変えられます。聖書で最初の苦しみは堕落の直後(創 3:)、女は出産、男は労働の苦しみです。パウロは人間関係全般において「キリストを恐れて､互いに従い合いなさい。」妻たちよ夫たちよと、キリストがされたように仕え合えと語ります(ｴﾍﾟ 5:)。苦しみは人の罪に起因します。しかし罪と無関係の御子に苦しみを負わせて、化学反応が起きます。単に苦しみが罪の代償でなく、プラスとなることです。

一つ目に「万物の存在の目的であり､また原因でもある神」ゆえに、世界で罪が人を苦しめていることに神は痛んでおられます。家庭も職場も国際間も、相手を立て上げるよりも自分の利益を主張する結果、無秩序に陥っています。全てはアダムの罪の実ですが、この悲惨をどうにかしたいと神は罪を悲しみ、私たちを愛するゆえに、御使いではなく実子の主イエスを最終兵器とされた。罪や弱さは自己責任という無責任＆無関心は退けられ、その動機は愛でした。

二つ目に主イエスが「救いの創始者(＝指導者)」私たちと同じ血と肉を有し人となられ、人が最も恐れるさばきと死を負って、悪魔の力を滅ぼしました。「罪の宥めがなされた」だけでなく、「すべての点で兄弟たちと同じように～自ら試みを受けて苦しまれた」御子の十字架を負う生き方に模範があります。生まれつき盲人の苦しみに対し「この人に神のわざが現れるため」(ﾖﾊ 9:2-3)言われたのは、この人の生まれる前から、そして十字架の業の完成の暁には、栄光に変えられると御存知だからです。心の中に主が働く空間はありますか。

三つ目に全ての兄姉のため「同じようにならなければなりませんでした。」私たちもパリサイ人やヨブの三友人のような、上から目線の態度を悔い改め、その人の側までへりくだることです。私たちが救われたのは主からの縁です。同じ家庭や教会に結ばれる人間関係も同様です。聖霊の矢印は外に向きます。心の中で人を受け入れて愛を言い表すならば、証しの地境は広げられます。 主が苦しみ「完全」とされたように、愛し仕え合う妥協なき者となりましょう。

12 月 1 日

「家を建てる人」

ヘブル 3:1-4

武安　宏樹 牧師

①「天の召し」

私たちはキリスト者ですが歴とした人で、外見やＩＱや運動性能の特長も、主イエスさえ女性の胎内から生まれ育児を受けたように、変化はありません。むしろ世の人々の方が優秀なこともあります。私たちは何者なのでしょうか。地上で証し人となることを願いつつ、笑い者になってばかりの小生でしたが、天から御子が地上に来られて苦しみを受けたのは、世に生きる私たちのため、天の所属となるためであり、地上で何を遺すかが重要ではないと知りました。世の常識を踏まえつつも、それ以前に天の価値観で立っていますか。地上で建て上げたものは朽ちていきます。永遠に残るものを選び取るのが信仰です。

②「家～教会」

「家」の原語オイコスは建物としてだけでなく、家族や家系やイスラエルの民のことにも用いられ、新約時代に「神の家」とは聖徒の群れを指しています。愛宕山教会は神の家であり私たちの家なので、海外から帰国し礼拝に集うと、家に帰ってきたようだと言われます。会堂は 40 年以上、信徒もそれ以上不変。されど建物も人も牧師も変わると居心地悪くなるかというと、そうではなく、「わたしの父の家には住む所がたくさんあります。」(ﾖﾊ 14:2) 愛と義と寛容があれば 50 年以上集う人も、最近救われた人も、他から来た人も住めるのです。教会は皮袋で変えるべきものは大胆に、されど御言葉と聖霊は変わりません。

③「建てる」

建築に様々な工法があるように、教会運営も牧師のやり方含め様々ですが、聖徒全てが教会を建て上げる職人なので、いかに力を合わせるかが大事です。分裂状態では困難なことは勿論ですが、教会は人のものではなく神のもので、私たちはキリストのからだの一部分だから、規則的な成長を遂げるのでなく、折に適って神が成長させてくださる。「私たちは神のために働く同労者です」に教えられます（Ｉｺﾘ 3:6-10）。個人も教会も賜物の注がれ方はいろいろです。天来の主の愛が私たちのうちに流れ、超自然的なことが起こる期待をもって、地上では忍耐と寛容をもって淡々と、一つ心で建てるのが信仰者の神髄です。

12 月 8 日

「私たちが神の家」

ヘブル 3:5-6

武安　宏樹 牧師

① モーセ的な神の家（５節）

「後に語られることを証しする」モーセが預言者＆祭司として導く神の家は、来るべきキリストに在る教会のひな型として、違いと限界を明らかにします。「神の家全体の中で」それはそれで大変なことですが、家の中で駆けずり回る、神と人の間に立つ中間管理職でした。「しもべ」の原語は他の登場箇所と違い、自由に行われる個人的な奉仕の意で、奴隷よりも人格と職能が重んじられて、裁量も与えられていますが、主従関係で「しもべ」の立場に変わりありません。図で示すとトップダウンで神の下にモーセが居て、その下に祭司や長老らが、民をまとめる形で、王も預言者も民も主の下僕の位置にあることは同じです。新約時代の教会も教職者が御言葉を取り次ぎ、役員会や長老会が補佐しつつ、群れをまとめることで秩序が保たれますが、その半面で自分から主に求めて、民全体や教会や地域を見回して、自分しか出来ないことがあるのではないか、そう考えて提案する主体性が欠落して、指示待ちになることがよくあります。受け身だと荒野の民の如く、惑わされて短絡的で無責任な心理が蔓延します。

② キリスト的な神の家（６節）

モーセは「神の家全体の中で(in)」に対し、キリストの「神の家を」原語では、「上に(on/over)」イメージとしては天と地をキリストが股にかけ大きな手で、教会全体だけでなく世界全体を治めています。「しもべ」と「御子」の違いは、主従関係と親子関係に相当し、後者は前者に比べ親密度が根本的に違います。常に父の大きな手に抱かれつつ、三位一体＆三人三脚の変わらない愛を以て、教会を世と罪と悪魔から守られる御子には、最強のしもべでもかないません。「私たちが神の家」は「私たちこそ」(共同訳)と強調されます。この自意識こそ、キリストと各部分の一体性と、不要な部分無く愛と配慮の通い合うからだが、脳の司令の下で口も手も足も動き、救いと喜びを共有する姿です(Ⅰコリ 12:)。最後に「もし確信と、希望による誇りを持ち続けさえすれば」条件を示します。皆さんの心はキリストにつながっていますか。個人的につながるだけでなく、部分として教会と兄姉たちに組み合わされる、ダイナミズムを感じますか。御体が共に働く麗しさに励まされて、私たちは信仰の誇りを持てるのです。

12 月 15 日

「頑なにならないように」

ヘブル 3:7-19

武安　宏樹 牧師

詩 95 篇からの引用で、荒野を彷徨うイスラエルの民が水に事欠きモーセに出エジプトが間違いと神に対する不満をぶつけ、そして反逆は民だけでなく、モーセも次の同様の機会に、命じるだけでなく御言葉に反して岩を二度打つ、愚を犯すことで、当時の民だけでなくモーセも約束の地を踏めませんでした。カデシュ･バルネアの停滞も然り。彼らの不従順の数々は御言葉を聞かずに、目にする敵の多さや人の声に惑わされたからで、旧約時代の悪例に倣うなと、さもないと完全な救いを頂いた者として、今日の罰の方が甚大だと語ります。

「だから著者は悪魔が巧妙な手立てで彼らの心の中に入り、策略を用いて彼らを神から遠ざけてしまわないように、相互の諭し合いによって刺激し合えと言っている。この危険にさらされていない者は一人もいない。騙されることはこの上なく簡単なことだからであり、騙されると頑固な心になってしまう。このことから分かるのは、激励という絶えざる刺激によって励まされることが私たちにはどれほど必要なことか、である」(ｶﾙｳﾞｧﾝ)「まず言えることは、一人ぼっちの信仰生活では駄目だということです。信仰の仲間が必要なのです。最も良い信仰の仲間は教会です。霊的家庭である教会に根付かないで信仰生活している人は、独り善がりになりやすいのです。兄姉たちが互いに信仰の励まし合いをすることで、健全に信仰生活をしていくことができます。他の兄姉からの励ましを受け入れる柔らかい心が必要です。神に堅く結びついている人は、同時に兄姉たちに対しても柔軟な心を持っている人であるということが出来るでしょう。」(尾山令仁)

「互いに愛し合いなさい」には、群れから羊を引き離そうとする獰猛な狼に、身を挺し守れとの含みもあります。励ましに何を語るか簡単ではありません。それより大事なのは、罪を犯してきた私たちが当然のように立っているのは、静かに大祭司イエスが共に居られたから。「あずかる」は共に受ける意です。「励ます」は「慰める」意も含み、この語は「パラ(そばに)」＋「カレオー(呼ぶ)」。名詞「パラクレートス」＝「助け主」(ﾖﾊ 14:16)。私たちは頑なにならないよう、励まし合いましょう。もし知らずのうちに頑なさが溶解されていたのならば、主イエスの和解の御業と、現在進行形の内住の聖霊の故だと感謝しましょう。

12 月 22 日

「愛」

ヨハネ 3:16

武安　宏樹 牧師

美空ひばり「愛(あい)燦燦(さんさん)」(小椋(おぐら)佳(けい)作詞･曲/1986)に①雨潸潸(さんさん)②風散散(さんざん)③愛燦燦(さんさん)、たしかに私たちの人生は山あり谷あり、時に雨や風それも暴風雨にさらされ、含蓄深い詞と感心します。順境も逆境も巡り合わせを受け止め向き合いつつ、他人を愛して、ひいては自分も愛することが出来ると、「仕合(しあ)わせ」について、語っているようです。たしかに私たちは向き合い方で人生の風向きが変わり、過去を根に持ちくよくよ生きると、顔や体形に現れ周囲も避けるようになる。前を向いて、残された人生で何が出来うるかと未来志向に生きたいものです。

とはいえ私たちは愛燦燦と受けて、なおかつ発信する者でありたいですが。これが非常に難しい。欧米はアイラブユーと夫婦親子で毎日繰り返しますが、日本人はお世辞にも愛情表現がうまいとは言えず、面倒臭く照れ臭いもの。聖書には「愛」が多数登場しますが、伝来に際してフランシスコ･ザビエルは、「御大切(ごたいせつ)」という言葉で愛を説きました。これなら己の意志で積極的に愛する意味が伝わります。自分の子を大切にするのは、血のつながりゆえでしょう。伴侶を大切にするのは、世界でたった一人に愛を誓い合う契(ちぎ)りゆえでしょう。ところが愛は継続と拡大が難しい。平安時代の源氏物語「もののあはれ」にも、枕草子「をかし」にも、人間だけでなく自然や時間への愛情が見られますが、日本人は感性の人種で、裏を返せば絶対的実在として愛を認めてはいません。

「愛し合う」「御大切(ごたいせつ)に」されど自分の内側に蔵が無いと、すぐに枯渇します。兄弟や友人の間で愛を奪い合い、比較し合うのは、愛の量に自信が無いから。このことは世界中どこも同じです。けれども一つだけ違う人種が存在します。キリストを人生の主「御大切」と信じた者で、彼らの内に愛の倉庫が在ります。本日の聖句から、一つ目に「そのひとり子をお与えになったほど」愛の程度が、2000 年前の史実として明記されます。人間の肉親愛は守って育てる愛ですが、神の愛は信じて生きようとする者のために、愛(まな)息子を差し出す犠牲愛です。キリスト者はこの愛を模範とします。二つ目にキリストの愛は死だけでなく、死という人類最大の敵に打ち勝ち、弟子たちに復活を証明した永遠の愛です。今も働かれる天からの愛、かつ内在の愛。この愛を適用して成長するのです。

12 月 29 日

「あなたには確かに将来がある」

箴言 23:18

武安　宏樹 牧師

年間聖句について年始の礼拝で講解しましたが、どれくらい適用できたか、おさらいしたいと思います。本年は能登地震で幕を開け未だ復興には程遠く、国内外政治も金＆権力争い＆女性問題など、信頼を損なわれる事態が数多く、中東やウクライナの和平も見えてこず、世の中なかなか明るい話題が聞けず、わが国キリスト教界も高齢化で青息吐息。厳しい時代の中で私たちがいかに、御言葉の希望に立ち「あなたには確かに将来がある。」と語れるか問われます。「将来」は原語で「終わり」「報い」「地の果て」「子孫」など、行く末のイメージで、バビロン捕囚を前にエレミヤは亡国の彼方にある希望を語ります(エレ 29:11)。短期的には罪の報いから、余計な誇りや偽りの確信は取り去られるとしても、将来的には御自分のもとに戻って来るための愛としての、御手がありました。このような視点で神は御自分の民に、期待をすることを忘れてはなりません。時間的に長い目で今を判断し、神がその人に注ぐ愛と賜物から大きな目で、見守りながら時に叱咤激励する。聖歌「数えてみよ主の恵み」にふさわしく、私たちが神からどのように受けたか、年の瀬に振り返るとより見えてきます。

本年の当教会の歩みでは、様々な取り組みや人間関係で新しい方が導かれ、福音を証しできたこと感謝しつつ、顕著だったのは帰って来た方が多くいて、数ヶ月や数年の空白を経て教会生活に復帰したり、音信不通の他住会員とも突然 LINE が開通し生活の困難の打開を見たり、45 年前に教会学校に集う方が、遺言でキリスト教葬儀を出来たり、50 年前に受洗し離れた方が親族の死から、行く末を思案し再訪されたり、信徒葬儀で離れていた家族が集められたり、子どもクリスマスで期せずしてＯＧ集結や、他にも心身不調からの復帰など、以上は感謝を列挙しただけでなく、果して私たちは祈ってはきたけれども、恥ずべきことに想定外だったのではないか。私たちに欠けている視点として、やがて離れている人々も主のもとに帰って来る期待を、持つべきではないか。放蕩息子の父は弟息子帰還のはるか前から、家の外で待ち構えていました。想定内だったからです。しかし兄息子としては想定外＆論外で憤慨しました。父の愛と寛容が想定外＆規格外だからで、兄の器が父の愛と同様だったなら、早く帰宅できたでしょう。悔い改めつつ、将来を期待する者になりましょう。